

『芸術家』(一七八九年)と『パンと葡萄酒』

(一八〇〇年—一八〇一年)

——シラーからヘルダーリンへ——

„Die Künstler“ (1789) und „Brod und Wein“

(1800-1801)

—— Von Schiller zu Hölderlin ——

高橋 克己

人文学部独文研究室

『AKAHASHI, Katsumi

Seminar für Deutsche Philologie der Philosophischen Fakultät

〔第46巻・縦組〕

はじめに (Einleitung)		一 (1) 頁
(1) 序言 (Vorwort)		二 (2) 頁
(2) 三部構成 (Triade)		二 (2) 頁
(3) キリシヤ (Griechentum)		三 (3) 頁
(4) キリスト (Christus)		四 (4) 頁
(5) 創造の終結 (Vollendung der Schöpfung)		四 (4) 頁
(6) 美神ウーラニア (Urania Aphrodite)		五 (5) 頁
(7) 人倫と美 (Sittlichkeit und Schönheit)		七 (7) 頁
(8) 文芸復興 (Renaissance)		七 (7) 頁
(9) 魂の不滅 (Unsterblichkeit der Seele)		八 (8) 頁
(10) 盟約 (Bund)		九 (9) 頁
(11) 自然と芸術 (Natur und Kunst)		九 (9) 頁
(12) 夜 (Nacht)		一一 (11) 頁
和文註解 (Anmerkungen)		一一 (11) 頁
欧文註解 (Quellenachweis)		一二 (12) 頁
原典 („Die Künstler“, „Brod und Wein“)		一三 (13) 頁
Zusammenfassung/Sommaire/Abstract		一三 (13) 頁
Inhalt : Table des matières : Contents		一四 (14) 頁
		一四 (14) 頁
		一六 (16) 頁
		二一 (21) 頁
		二二 (22) 頁
		二六 (26) 頁
		三六 (36) 頁
		五二 (52) 頁
		五三 (53) 頁
		五九 (59) 頁
		六〇 (60) 頁

はじめに (Einleitung)

十八世紀ドイツの教訓詩や思想詩と『パンと葡萄酒』との関連は、独文学上における今迄の研究成果ならば、既に取り扱って見ように見受けられるが、実はそうではない。例えば、ベツォルド著「ヘルダーリンの『パンと葡萄酒』」(一八九六年—九七年)でも、シュミット著「ヘルダーリンのエレギー『パンと葡萄酒』」(一九六八年)においても、ハラーの『悪の根源について』(一七三四年)やウーツの『弁論論』(一七五五年)が引き合いに出されるまでに至っていないのみならず、シラーの『ギリシアの神々』や『芸術家』などとの関連への言及すら見いだされない。例えは当論において話題とする、『芸術家』第六六句以下と『パンと葡萄酒』第一二七句とに共通する「楽園喪失」のことか、また「松明をかざす者」と「若さに輝くポリュデウケースの姿」との関連などが、残念ながら修辞上の言葉使いの点でさえ、両研究ともに言及されていないのが実情なのである。

『パンと葡萄酒』の詩想展開を理解する上で、筆者はまず古典ギリシアとキリスト教西欧との問題に関心を寄せていたので、シラーの『芸術家』など十八世紀ドイツ思想詩との結びつきを話題とするのはその後となった。この点では筆者のみならず、文芸学上における在来の研究成果においても、主眼は『聖書』や古典詩文にあつたと考えられる。更に、ハイム著『ロマン派』(一八七〇年)で解された様な、「ロマン派詩文の傍系」としてのヘルダーリン像も今なお根強いので、『パンと葡萄酒』などの抒情詩が、ロマン主義との係わりで話題とされても、啓蒙期の成果と言える『芸術家』にはとかく関連させられることがなかったのも不思議ではない。またヴェント著『ヘルダーリンとシラー』(一九二九年)に見られるように、『芸術家』との関連でヘルダーリンの作品は今迄、主に初期抒情詩の讃歌類に限られていたことも事実である。

『芸術家』と『パンと葡萄酒』

高橋克己

(1) 序言 (Vorwort)

ヘルダーリンの思想詩『パンと葡萄酒』は、先輩シラーの労作に内容上および表現上で負う所が大きいと考えられる。例えば、この思想詩の中央部において「至福なるギリシア」(第五五句)の「神々の昼」(第七二句)が高唱されていることからして、直ちにシラーの『ギリシアの神々』初稿(二七八八年三月刊)が考え併されるのも当然であり、実は筆者も既に『ギリシアの神々』から『パンと葡萄酒』へと至る詩想に関して、別論『ヘルダーリンの西欧ギリシア論―「至福なるギリシア」』(一九八五年―八六年刊)において、その(二)シラーの問題提起より始めて、その(二)古典ギリシアとキリスト教西欧にかけて論述展開したことがある¹⁾。

ところで『芸術家』(二七八九年三月刊)はシラーが、『ギリシアの神々』刊行の一年後に公刊した思想詩の雄篇であり、当時のシラー抒情詩歌の業績は両者あいまって双璧をなすと考えられる。そして両作品は相互に補い合い、シラーの目指した詩業全体へと開かれた貴重な両眼となっている。従って、既に『ギリシアの神々』から『パンと葡萄酒』へと開いた眺望に加えて、更に『芸術家』からも『パンと葡萄酒』へと見通しをつけてゆくことが出来るならば、この複眼で以てシラーからヘルダーリンへの詩想展開を辿ることが可能となるであろう。

共に思想詩でも、一方『ギリシアの神々』は悲歌風の短調であるが、他方『芸術家』は威風堂々たる雄弁の長調をなしている。そして『パンと葡萄酒』(一八〇〇年―〇一年)となると、この様な短調と長調との両方の明暗が巧みに織り成されつつ、幾重にも音調の転移(Wechsel der Töne)²⁾が遂行され、言わば思想詩そのものが語る通り、「悲愴かつ壮麗な(traurig und prächtig)」(第一八句)る作品が形造られることになる。この様な微妙な心の變は、残念ながらシラーの思想詩に期待できない。す

なわち劇作上の才能に恵まれ大胆な問題提起で人を驚かせたシラーではあるが、自ら切り開いた劇的な魂の動揺を、透明な心情の流れへと純化する抒情の才には余り恵まれていなかったと思われるからである。

確かにシラーの言葉は直情径行であり、ヘルダーリンの表現のように練られたものではないが、逆にそれだけの魅力もある。例えば『ギリシアの神々』は西欧意識における心の裂け目を、言わば外科の名医のように大胆に切開して見せたものであり、また『芸術家』は詩人が良しとする所で以て思いの丈を尽くした感がある。共に円熟した作品ではないが、正にそれ故に生き生きと若々しい自己認識が、新鮮な清水の如く迸る爽やかな出来栄を示しており、これだけ瑞瑞しい抒情の息吹きは他の思想詩にまず見い出せないであろうし、シラー自身の作品においても他の時期のものには前にせよ後にせよ期待できないと思われる。実に時期も時期であった。正に啓蒙と革命の時代における社会政治上の特筆すべきフランス革命勃発(二七八九年七月十四日)が、『ギリシアの神々』や『芸術家』の目前に控えていたのである。

(2) 三部構成 (Triade)

『芸術家』と『パンと葡萄酒』の類似を考える場合、各々の中央部(第二部)³⁾で古典ギリシア芸術時代が高唱されている点がまず留意される。他方『ギリシアの神々』ではギリシアが冒頭から話題とされている。そして『芸術家』は『パンと葡萄酒』同様に目下の西欧キリスト教世界、すなわち十八世紀啓蒙期から始め、しかも両者ともに当の西欧の現実から、古典ギリシアへと至る止み難い心の動靜に着眼してゆく。更にギリシアの歌われた後に再び西欧キリスト教の現在へと回帰し、未来を指すのも、『パンと葡萄酒』と『芸術家』に共通の詩想展開である。

蓋し『パンと葡萄酒』の場合、第三部での西欧キリスト教世界は、第二部の古典ギリシアの光輝との明暗の下に陰影を深くし、冒頭第一部の西欧

の現実とは相当に色合いを異にするのであるが、他方『芸術家』の場合、第一部と第三部とは、中央に第二部のギリシア世界を挟んではいらぬもの、実質上余り大きな相違を示していない。つまり『芸術家』の第三部は第一部と基調を異にせず共に長調で高らかに謳われているため、『パンと葡萄酒』第三部のように第一部から見事に色調が転移した妙が見られないと言える。故にシラーの作品にしばしば見受けられる軍隊行進曲風の単調さが、『芸術家』にも免れ難いと思われるのである。

十八世紀啓蒙期における西欧人を『芸術家』では、始めから「時の完熟せし息子 (der reifste Sohn der Zeit)」（第六句）と積極的に肯定し、声高らかに歌い出された雄弁な詩句は、次第に教訓詩 (Lehrdichtung) の性格を濃くしてゆく。つまり思索が反問を繰り返しつつつづねる思想詩 (Gedankenlyrik) ならではの醍醐味に『芸術家』は欠けると言える。端的に云えば、『芸術家』は光明に満ちてはいるものの、他方で啓蒙期を厳しく「乏しき時代 (dürftige Zeit)」（第一二二句）と短調で規定し同時に「西欧の果実 (Frucht von Hesperien)」（第一五〇句）と長調で摺み直す『パンと葡萄酒』第三部の様な濃淡の細やかなさには乏しいのである。

但し『芸術家』第三部は、第一部の焼き直しではない。基調は変わらなけれども、第一部が往相とすると、第三部は還相となる。例えば、「美の曙光なす門を通りてのみ (Nur durch das Morgenhor der Schönen) 汝は踏みいる認識の国土へ (drangst du in der Erkenntnis Land.)」（第三四句―第三五句）と、第二部では「美」から「学知」認識へと突き抜ける往相が言明されているのに対し、他方の第三部では「学知 (認識が美へと円熟) (wenn seine Wissenschaft, der Schönheit zugereift)」、芸術作品へと高貴化される (zum Kunstwerk wird gedelt seyn)」（第四〇四句―第四〇五句）と還相が表わされる。つまり滔々と溢れ出でた第一部の詩想は、『パンと葡萄酒』と同様に、第三部において回帰することになる。

Wie sich in sieben milden Strahlen
der weisse Schimmer lieblich bricht,
wie sieben Regenbogenstrahlen
zerrinnen in das weisse Licht:

あたかも七条の柔和な光へと

一条の白色光が優しく碎けるように、
あたかも七色の虹の光が

飛散して一条の白色光となるように、
〔『芸術家』第四七四句―第四七七句〕

全四八一句に亘る長詩の終結部を飾るこの様な光の屈折の比喩で以て、『芸術家』全体の詩想展開が象徴されていると言えよう。

(3) ギリシア (Griechentum)

古典ギリシアとキリスト教西欧との間で際立つ明暗は『ギリシアの神々』において顕著となったものであるが、『芸術家』の場合には当の明暗が殺がれ、他方むしろギリシアと西欧との類縁の側面が前方に押し出されて来る。この縁の結び目が「自然の主 (Herr der Natur)」（第一〇句）たる『芸術家 (Künstler)』としての「人間 (Mensch)」（第一句）である。他方『パンと葡萄酒』では『ギリシアの神々』と同様に、この両者の結び付きが『芸術家』でのように樂觀的見通しの下に承認され得ず、むしろ双方の矛盾相克は亀裂を深くせざるを得ない。但しこの自己省察の坩堝の只中において、なお何らかの西欧とギリシアとの繋ぎ目が渴望される。例えば『パンと葡萄酒』なら、この結節点が空無の中観として「現われ (erschienen)」（第一二九句）かつ「消えた (schwand)」（第一三〇句）と歌

われる有無の両義性を孕むキリスト像である^①。

古典期のシラーにおける当の昔今の接点は、「詩歌(Gesang)」の古里ギリシアを「現実の生(Leben)」へと結ぶ「仮象」と考えられる。

① Was unsterblich im Gesang soll leben,
② Muß im Leben untergehn.

③ 不滅に詩歌の中で生き残るべきものは、
④ 現実の生においては滅びねばならぬ^②。

(一八〇〇年刊『ギリシアの神々』再稿、第一六節、第二二七句以下
結句二句)

かくして古典造形が仮象(Schein)なす詩歌象徴として、「現実の生」に超然と起立する。蓋しこの姿勢は、逆に現実の生に迫りこの内実を変革するような悲劇性を孕まず、言わば彼岸に泡の如く罪なき牧歌風ギリシアを「歌曲の妖精の国(Feeoland der Lieder)」^③として招来する。この様にシラーの解決は、『芸術家』のような現状肯定にせよ、『ギリシアの神々』再稿のような現実に対する諦観にせよ、共に晴がましい性格を拭い去れないのである。

ところで、晴やかな牧歌風ギリシアを招来せざるを得なかった西欧キリスト者の魂の淵に留意するならば、当の明朗さにも味わい深さが加わることになる。例えば『芸術家』第一部で「後の光明への復帰は感性の難路を辿り(Seine späte Wiederkehr zum Lichte / auf schwerem Sinnempfad)」(第ハ八句―第ハ九句)と歌われたりする詩節、また第二部終結近くで「憂慮に怯え、戦きに充ちた合唱(der Sorgen schauervoller Chor)」(第三四六句)が言及される箇所などに注目すると、この様な「感性の難路」とか「憂慮」の現実を礎として、初めて明朗な牧歌風ギリシア世界がその

上に天国の楽園の如く築き上げられることが理解されるのである。

ところが、古典ギリシアの神界へと高揚する此岸から彼岸への止み難い靈威に対し、逆に『パンと葡萄酒』終結部でのキリスト像の如く、彼岸の「至福なるギリシア」から現実の此岸キリスト教西欧へと来臨する慈悲の神性を、シラーの詩歌作品に見い出すことは難い。他方ヘルダーリンの『パンと葡萄酒』を終結するキリスト像の格別の意義が此所にある。つまり神人キリストが終結し宥和した「至福なるギリシア」は、一重に「拒み難い仮象(unwiderstehlicher Schein)」^④として「高遠(überfliegend)」^⑤に彼岸へと留まるのではなくて、同時に現実に生きる西欧キリスト者の魂と対話すべく古典として受容され吟味されることになるのである。

(4) キリスト(Christus)

世間の通過儀礼上において冠婚葬祭で話題となるならば恐らく無縁であるが、西欧キリスト者シラー自身の心の拠り所を取てキリストとして問うならば話は別となる。ところで、この心の拠り所としてのキリストは『芸術家』の場合、『ギリシアの神々』初稿のように「神聖なる野蛮人(heiliger Barbar)」^⑥と直に名指しされてはいないのであるが、前述した「憂慮に怯え、戦きに充ちた合唱」の様に西欧意識裏で魂の暗い淵が覗く折に、正にそこにキリストは居合わせていると思われる。例えば当の「合唱」は十字架キリスト像を拜む教会堂の中に見い出され、こう言った「憂慮」と「戦き」の場はシラーにとり「現世の重き幻像(als Erenlebens / Schweres Traumbild)」^⑦と映じたであろう。そして他方の「理想の国(des Ideales Reich)」^⑧は神域として、芸術の古里ギリシアに範例を仰ぐことになる。

この脈絡でキリストが宥和と救済の要となるならば、自ずとそれは『パンと葡萄酒』での「至福なるギリシア」のような神域に属することになるのであるが、神人キリストを明確に「ギリシアの神々」の仲間に加え入れ

ることは後世ヘルダーリンの独創であつて、先輩シラーの思い及ばざる所であつた。しかし神域なす「理想の国」と現実のキリスト教西欧とを繋ぐ『パンと葡萄酒』の中観キリスト像、例えばその終結部において「松明をかざす至高者の息子 (Fakelschwinger des Höchsten / Sohn)」(第一五五句―第一五六句)として彼岸から此岸を指して現われるキリスト像へと結実する詩想の端初ならば、既に『芸術家』第二五〇句以下に現われる「ポリュデウケースの姿 (Poluxbild) ⑤」(第二五一句)に具現されていると思われる。

④ Da zeigte sich mit umgestürzten Lichte,
an Kastor angelehnt, ein blühend Poluxbild;

⑤ そこに示されたのは逆しまにした(松明の)光を手に、
カストールに寄りかかる、若さに輝くポリュデウケースの姿。

『芸術家』第二五〇句―第二五一句)

古代ギリシアの神話上、弟ポリュデウケースは神々の如く不滅となり得た折に、死んだ兄カストールへと自らの不死性を半分譲り渡したし、「至高者」ゼウスの「息子」として兄弟仲良く半死半生となった。従つて、この「若さに輝くポリュデウケースの姿 (Poluxbild)」は、神と人との繋ぎ目として、人間が神域へと回帰でき得るようにと受難した神人キリストの姿を誘うことになり、実際『パンと葡萄酒』終結部のキリスト像にその残影を残していると考えられるのである。

『芸術家』は既に述べたように、目下の現実キリスト教西欧の「人間」たる「芸術家」に全幅の信頼を置いており、この自然本性を越えた彼方からの他力は問題とならない。故に人性の根源からの遠離とそこへの再帰も、当の自然本性に則つて理解される。

五(5) 『芸術家』(一七八九年)と『パンと葡萄酒』(一八〇〇―一八〇一年)(高橋)

⑥ Fern dämmre schon in euerm Spiegel
das kommende Jahrhundert auf.

⑦ 彼方には既に白み始め、汝ら芸術家の心を鏡に
突 来たるべき世紀が立ち昇るのだ。

『芸術家』第四六八句―第四六九句)

あくまで自力甦生を目指す『芸術家』の基調は、その終結部における光のプリズムの詩歌象徴がこれを如実に物語っている。すなわち前述の如く「一条の白色光 (der weisse Schimmer)」から分散して「虹の七色 (sieben Regenbogenstrahlen)」が^{レキ}再びこの多様が透明な白色光の一者へと回帰する物理・自然上の光との類似で以て、存在全体の生命圏が象徴されているのである。

するとキリストの神言^{ゴス}のように目に見えぬ精神の光が射しこむ余地は『芸術家』に残されていないことになり、物理自然の圏内に閉じた現存了解で存在全体を被つてしまふ無理が生ぜざるを得ない。ところが『芸術家』全体を貫く止み難い理念追求の気迫は、この物理自然の圏内を突き破り精神の光を渴望している。但しゲーテの『ファウスト』にも見られる当の理想主義が高邁 (überfliegend) となり、「高みへと落ちこむ (in die Höhe fallen) ⑧」ことのないように、何らか彼岸からの働きかけが「永遠の女性 (Das Ewig-Weibliche) ⑨」にせよ、或いは『パンと葡萄酒』終結部のキリスト像にせよ要請されることになるのである。

(5) 創造の終結 (Vollendung der Schöpfung)

確かに『芸術家』も『パンと葡萄酒』も古代ギリシア神話世界を抜きにしては考え難いが、しかし同時に『聖書』の神観をも無視するわけにゆかない。殊に後者は詩想展開において言葉少なに時折話題となるに過ぎない

が、但し作品全体にはこの寡黙の重鎮が抜き差しならぬものとして働いている点を見逃せない。例えば既に述べた神人キリストと並んで、注目すべきは『聖書』に言う「父(Vater)²⁸⁾」なる「創造主(der Erschaffende)²⁹⁾」である。

交 Als der Erschaffende von seinem Angesichte
den Menschen in die Sterblichkeit verwief,

卍 als alle Himmlischen ihr Antlitz von ihm wandten,

交 創造主が自らの面前から

を人間を死すべき身へと追放し、

卍 神々が面を人間から背けた時、

(『芸術家』第百八十六句—第七〇句)

卍 Aufwärts stiegen sie all, ...

卍 Als der Vater gewandt sein Angesicht von den Menschen,

卍 天上へと神々が全て去り、...

卍 父が面を人間たちから背けた時³⁰⁾、

(『パンと葡萄酒』第一二六句以下)

此所で使われている言葉から、『パンと葡萄酒』が『芸術家』を踏まえていると考えるのは妥当で、しかも両者とも同じ楽園(Paradies)追放のことを物語っている。但し楽園喪失もそれに先立つ天地創造も『芸術家』の場合、古代ギリシア芸術時代の成立以前にあったと読み取れるが、他方

『パンと葡萄酒』では天地自然も楽園天国も両者ともに「至福なるギリシア」に他ならない。そしてヘルダーリンの場合に楽園喪失は同時に、神人キリストの受難と神の死による楽園ギリシアの終結(失楽園)と宥和(楽園ギリシアの完成)を意味しているのである。

この様に『パンと葡萄酒』では神人キリストの死が重ね合わされることにより、楽園喪失の意味に深い陰影が宿り、しかも楽園ギリシアは過去の死圏へ古典として遠のき、彼岸にバルテノン神殿さながらに厳然と聳えるのであるが、他方『芸術家』では「創造」の根源から乖離したにも拘わらず、死すべき「人間」は「芸術家」として新たな「創造」へと向かう道を保証されている。その様は二段構えとなっており、『芸術家』でシラーは「最初の創造(die erste Schöpfung)」(第二三八句)が「直接」自然から誕生した最初の芸術(die erste Kunst aus der Natur)」(第一五三句)として芽生えたあと、更に古典芸術が「より高き第二の芸術(eine zweyte höhere Kunst)」(第一五五句)として花開き、古代ギリシア造形の如き様式美へと円熟する旨を述べる。かくして芸術創作により「後の光明への復帰は感性の難路を辿り」(第百八十六句—第百八十九句)つつ成就され、竟には「一条の光明の流れの中へ復帰する(in Einen Strom des Lichts zurück)」(最終句・第百八十一句)のである。

前述の如く『芸術家』では、この様な物理自然上の光の屈折に象徴される一者への回帰が作品を締め括り、「創造」の終結が希望に満ちた実現待望の下に楽観視される。勿論「感性の難路を辿り後の光明への復帰は」実現されるには違いないが、余りに人性の将来の可能性に対し楽観展望の下にあるので、希望と絶望との両極を微妙にたゆとう心の揺れが、『芸術家』の詩想展開には期待できないことになる。つまり此所には、人間の真摯な言わばファウスト的努力に対し全幅の信頼を寄せる人間の善性への期待が色濃く長調として現われており³¹⁾、この明朗な長調の響きに徹し切れない『パンと葡萄酒』の詩想展開と区別されることになる。

一方へと徹し切れない『パンと葡萄酒』の詩想は、人間を性悪とも性善とも決め難い言わば絶望と希望との両極をたゆたい、目下の現実を「乏しき時代 (dürftige Zeit)」であると同時に「西欧の果実 (Frucht von Hesperien)」として複眼で見据え、両者の中観を独自の音調の転移による明暗で以て探求する。「創造」の終結とはシラーの言う如く「光明への復帰」なのであるが、この「復帰」が努力 (Streben) の一筋縄ではゆかない点を『パンと葡萄酒』は留意し、真摯な努力の筋を継承して「至福なるギリシア」を理念追求しながらも、同時にその様な彼方を目指す心の淵において、「至福なるギリシア」から現実の生者を指すキリスト像が「松明をかざす者」(第一五五句)として、あたかも重力の如く降り来たり、究極における「創造」の終結なす「光明への復帰」を密やかに予感させるのである。

(6) 美神ウーラニア (Urania Aphrodite)

巷の恋歌が目先の歓楽の母「キュテレイア女神ウエヌス (Venus Cytherea) ①」を讃えるのに対し、たとえ「人間」に踏み留まろうとも、『芸術家』の詩歌家徴で高唱されるのは、天体(ウーラノス)の諧調を司る「美神ウーラニア」として (als Urania) (第四三六句) の「優しきキュプリアー女神アプロディーテー (die sanfte Cypria) (第四三三句) であり、これが天地創造の精華である。ここで瞬時に燃える藁火の如き情念に係わる色恋の女神から目を転じ、恒常的な星辰の運行に神性を確かめる静観は、典雅沈静な古典ギリシア精神との親近を物語る。直接シラー自身が一七八九年二月九日ケルナー宛書簡で述べた、『芸術家』の主題「真理と人倫を美に包む (die Verhüllung der Wahrheit und Sittlichkeit in die Schönheit) ②」に相応しく、真理と人倫の尊厳に恥じぬ優美の女神アプロディーテーが、「畏怖と壮麗の女神ウーラニア (die furchtbar herrliche Urania) (第五九句) として召喚されるのである。

あらゆる認識が美の曙光を浴び、その成果が学知として竟には芸術作品へと円熟する。この学術行為の守護神がウーラニア美神アプロディーテーである。かく気長な学芸には、数行で終わる歌曲では覚束ない。むしろ自然と大交響曲を想わせる『芸術家』の如き長詩が勤勉の労作として望まれる。つまり一瞬の悟達が作品に結晶するのではなく、倦まず弛まず努力する人倫の偉容 (eine sittliche Größe) ③にこそ、真理の明鏡は映し出されることになる。

Nur dem Ernst, den keine Mühe bleichet,
Rauscht der Wahrheit tief versteckter Born,
Nur des Meissels schwerem Schlag erweicht
④ Sich des Marmors sprödes Korn.

如何なる労苦をも恐れぬ真摯に對してのみ、
滔々と真理の深く隠された泉が溢れ、
鑿刃の重々しい打撃にのみ応えて怯むのだ、
⑤ 大理石の粗い岩肌も ⑥。

⑥ 『理想と人生』第七七句—第八〇句)

此所にドイツの教訓詩 (Lehrdichtung) や思想詩 (Gedankenlyrik) を貫く基調が現われている。つまり『ファウスト』第一七九六句に言う「北歐人の堅忍不拔 (Des Nordens Dau'rbarkeit) ⑦」が骨の折れる労働の産物となり、年金生活階級や門閥の如く既に所与の取分が瞬時に靈感のように作動するのではなく、詩想の円熟を求めて思索を練り、表現に到らんとし、稿を改める積み重ねが、あたかも勤勞を貴ぶ市民生活の日常における地道な一歩一歩に似た大海亀の如き歩みを推し進めるのである。

色恋の神クビドーに射抜かれた様な気粉れな束の間の燃焼ではなく、

静かに着実に燃え続けるオリュムピアの聖火の如く持続する心の燈火がうち守る魂にこそ、抒情表現は思想へと高まり^②、美は真理を包みキユプリアー女神は天譜ウーラニアとなる。『芸術家』の目指す認識は、かく持久力もち生成する学知であり、既に予め図面に描かれた宇宙の設計図の模写ではない。それはむしろ時間軸に形造られる言わば音楽の響きに似た意識の流れとなる。蓋し『芸術家』の様に観念性の高い概念語が「理性により自由 (frei durch Vernunft)」、諸法により強固 (stark durch Gesetze)』(第七句)などと畳重ねられるとなると、当の意識内の響きは造形にて直観されるかわりに、貧しい抽象に呑み込まれる嫌いがある。そこで『パンと葡萄酒』では、殊にその冒頭の都市像において律動の波に乗り、「燈火と月影の光がみちる街路 (die erleuchtete Gasse)』(第一句)とか、「思慮深い家長 (ein sinniges Haupt)』(第六句)など、現実社会の具象形姿が観想されるのである。

(7) 人倫と美 (Sittlichkeit und Schönheit)

「有徳 (Tugend)』(第二四句や第四六句)とか「義務 (Pflichten)』(第三三句や第三二〇句)と言う倫理上の言葉が、『芸術家』を読んでいると案外目に留まる。これは抒情表現においても尚シラーが、高い道徳上の関心を失っていないことを物語っている。既に述べたように、「真理」のみならず、「人倫を美に包む」(註(18))ことも、『芸術家』の念願であった。故に審美と倫理は反目を解決せねばならぬのであるが、この両者の確執は既に『ギリシアの神々』において、古典神話の神々と『聖書』の唯一神との間における不可避の亀裂として提示されていた。そしてその折のシラーの判断によると、尊厳ある西欧キリスト者の倫理意識は、古典ギリシアの美の明鏡に映ずると、「神聖」だが「野蛮」(註(8))と言う評価を得たのであった。なぜなら「汝すすべし (Du sollst)』^③と裁く倫理意識に君臨する唯一神が、諧調なす自然の天地万有(ヘン・カイ・パーン)をも

越えた外夷に根を張り、この自然の調和を伝える古典芸術を偶像として破壊した史実が、念頭に浮かばざるを得ぬからである。

『芸術家』では、この西欧精神史における偶像破壊の蛮行が、正面切つて話題とならず、暗示されている。例えば「美の曙光なす門を通りてのみ認識の国土へ」(第三四句―第三五句)と歌われる時、天地万有の諧調なす美神ウーラニアを偶像として破壊することなき倫理意識が、西欧キリスト者に望まれている。更には丁度プラトンの理想国家論で、至高存在として「善のイデア」^④が話題となるように、『芸術家』でも美の究極が人倫 (Sittlichkeit) として歌われている。

Ihr Lichtpfad, schöner nur geschlungen, senket
sich in die Sonnenbahn der Sittlichkeit.

美の光の道は、一層と麗しく絡み合い、深沈してゆく

④ 人倫の日輪の軌道の中へと。

『芸術家』第八四句―第八五句)

この様に美から人倫へと見事な魂の軌跡を描く古典芸術が、西欧キリスト教近世にも誕生すること、これがシラーの祈念であり、この範例は古典ギリシア時代の芸術作品に具現されていると、詩人の心眼に映ったのである。この脈絡は、古典期シラーの美学芸術論でも問題となるもので、審美観にも倫理意識にも誠意もて応え得る古典ギリシア芸術を目指して、単なる優美 (Anmuth) でも単なる尊厳 (Würde) でもなき、両者の中観が稀有な崇高美として探求される^⑤。そしてこの際に倫理面を為になる (professe) とか、また美意識において楽しませる (delectare) と『詩論 (De arte poetica)』^⑥で述べられている啓蒙期の要請が、現存の深い所で統一される人倫として芸術が求められる。すなわち目先のこととして詩

人が意図し、読者を楽しませるとか教化するという次元から事態を掘り下げ、心底から感銘を与え自己認識に導き、何時とはなしに歓喜天に至らしめるに足る詩歌象徴が彫り刻まれる。

『芸術家』はこの点、表面上啓蒙期の要請に従い、滔々たる能弁の快音と教訓の波が織り成す長舌舌となつてゐるのであるが、但し同時に歌心の底を十九世紀ドイツ交響曲に通ずる生成する学知が、言わば「音楽的なもの」(Das Musikalische)⁽⁸⁾として、心情の奥底と響き合いながら時間意識を滔々と流れ、既に『パンと葡萄酒』や『ファウスト』の本質を先取りしてゐると言える。確かに啓蒙期特有の普遍意識において、「人間」一般を念頭に置く『芸術家』には、「祖国」(ドイツ)と自然に適い(vaterländisch und natürlich)、本来の始源より独創的に歌う(eigentlich original zu singen.)⁽⁹⁾と言つた自覚が明確となつてゐない。しかしながら少くとも、「人倫の本質(エートス)はダイモーンである」⁽¹⁰⁾という認識が此所には芽生え、敢てドイツ精神とするに恥じめ詩魂ダイモーンが「音楽的なもの」として意識下から立ち昇り、ドイツの偉容(Deutsche Größe)⁽¹¹⁾をそれとなく教えるとともに、実は読者を知らぬ間に心底から楽しませているのである。

(8) 文芸復興 (Renaissance)

もはや至高なる者は、概念構築によらず、むしろ芸術表現により探求される。中世学知の殿堂スコラ世界から遠のき、古典古代に倣い詩歌や芸術が復興して来たのもこの脈絡である。かつてはプラトーンやアリストテレーズの哲学知こそ、古代文化の精華と看做されていた⁽¹²⁾。だがこの文化史観が次第に転倒し、竟にはソークラテース以降ギリシア文化は「悲劇の死」⁽¹³⁾を迎え墮落し始めたと言ふ、ニーチエの思想圏が自覚され始める。するとシラーの『芸術家』とか、ヘルダーリンの『パンと葡萄酒』が、正にこの新たな西欧意識のコペルニクスの百八十度自己転回の枢軸として、見直さ

れることになる。

ところで、シラーやヘルダーリンは、後世の『音楽の精髓から悲劇の誕生』(一八七二年)の著者ニーチエのように判然と、西欧形而上学の祖プラトーンたちから精神文化が墮落し始めたと自覚してゐたわけではない。しかしながら両者ともに、学知認識が技芸の成果であるとともに、竟には芸術作品へと円熟する構想を抱いていたので、詩歌の言葉が解体して、学究の味気ない散文が優位に立つなどとは考え得ず、むしろ逆に文芸復興(ルネサンス)期にスコラ哲学を母胎として、ダンテの叙事詩『神曲』(La Comedia) (一四七二年)が誕生したように、啓蒙期の哲学知から詩歌を花咲かせることを目指したのである。

実は『ギリシアの神々』も『芸術家』も、シラーが本格化してカント哲学と取り組む以前の労作である。とは言うけれども、まともに直接カントの批判書を繙く前に、或る程度シラーは批判哲学の関心圏に踏みこんでいた模様である。例えば、カント哲学で鍵となる「仮象」(註(7))の問題にしても、既に『芸術家』で「影(Schatten)」(第一二七句)とか「像(Bild)」(第二八句)、あるいは「甘美な幻想(Liebliches Phantom)」(第三〇句)と、様々な表現で以て話題とされている。しかしながら『芸術家』では、「仮象」の筋があくまで言葉の上に留まる嫌いがあり、当の「仮象」が古典期シラーの代表作『理想と人生』冒頭でのように、「永遠に清澄にして明鏡の如く(Bewiglar und spiegelrein …)」⁽¹⁴⁾ (第一句)と、見事に彫り刻まれているわけではない。

確かに、古典期シラーの彫琢は、この様に典雅沈静の趣を宿している。しかしながら既に述べたように、当の「仮象」が「現実の生」(註(5))に迫り、その内実を交革する悲劇性を孕むまでには至っていない。そこでヘルダーリンは『パンと葡萄酒』で、シラーの場合に「仮象」として過去の彼岸に遠く古典芸術時代を、内省する魂の力により、「悲劇の誕生」を眼目とした「至福なるギリシア」として、西欧キリスト者の心意識の淵

に開き、しかも古典ギリシア悲劇祝祭の精華を、神話の神キリストとして招来する⁸⁶⁾。かくして、「仮象」と「現実」との相互対話は、「ギリシアの昼」(第二部)と「西欧の夜」(第三部)との織り成す明暗の下に、幾重にも展開され、その中観キリスト像は、昼夜ともに現われる月影に似て両界をまたぎ、後世キリスト者には現実への決断を迫る悲劇精神として、心の淵に空界月として宿るのである。

他方、文芸復興の意識は新生として、『パンと葡萄酒』においては第三部の最終節で、「西欧の果実 (Frucht von Hesperien)」(第一五〇句)と慎ましくも力強く歌われ、古典ギリシア精神の言わばオリュムピアの聖火を継承する近世ドイツ文化の自覚が、麗しい詩歌象徴となる。シラーはこの脈絡を、「時の完熟せし息子 (der reifste Sohn der Zeit)」(第六句)と、『芸術家』冒頭で高唱し、更にその第三部の始めにおいてイタリア文芸復興のことを歌う。

der junge Tag, im Westen neu empor,
und auf Hesperiens Gefilden sprossen
verjüngte Blüten Joniens hervor.

新たな白昼が、西方で新たに昇り、
して西欧の野に萌えたのだ

若返りしイオーニアの精華が大地から。
〔『芸術家』第三二八句—第三七〇句〕

ここで注目したいのは、シラーが『芸術家』冒頭では「完熟」と果実の比喩を使いながらも、結局は「西欧の果実」を物語らず、本筋ではあくまで「詩歌の花の階 (der Dichtung Blumenleiter)」(第四二八句)を、高唱している点である。

これに対して『パンと葡萄酒』では、ギリシア詩文の「言葉が花のごとく (Worte, wie Blumen)」(第九〇句)と中央第二部で了解され、この前提を踏まえて終結第三部において、「西欧 (Hesperien)」が「果実 (Frucht)」(第一五〇句)と認識される。実際ピンドロスの『酒神ディオニューソス讃歌 (ディーテュラムボス)⁸⁷⁾』を華麗に飾る、「葦」(第六八句)や「薔薇」(第一七句)に象徴される如き、精神史の青春時代ギリシアを念頭に置き、一七八九年一月二十二日ケルナー宛書簡で、シラーが「芸術家の姿 (Künstlerscheinung)」を「春に喩えた (mit dem Lenz verglichen)⁸⁸⁾」のも肯綮である。

芸術は、人間の使命 (die Bestimmung des Menschen) ではなく、
(後に) より高き果実の成る花 (die Blüthe einer höheren Frucht)
なのです⁸⁹⁾。

既に「仮象」に関して述べたように、結局シラーの詩作は、「現実の生」との対決を回避する諦観(註5))へと傾いている。ここに正に「乏しき時代」と批判される原因がある。

そこで『パンと葡萄酒』において、「乏しき時代の詩人 (Dichter in dürftiger Zeit)」(第一二二句)と自覚するヘルダーリンは、嚴肅に「時」の「果実」を考量する『聖書⁹⁰⁾』の神観を鑑みて、「芸術家の姿」をむしろ「秋」に喩え、「西欧の果実」(第一五〇句)を話題とする。もし古典詩歌の「仮象」へと「高邁」(註7))に逃避しなければ、当の「果実」は狂気に陥り朽ち果てるかも知れない。だが「歓呼する狂気 (frohlockender Wahnsinn)」(第四七句)をも受容する『パンと葡萄酒』の詩想は、「しかし麦一粒死なば、幾多の果実 (viel Früchte) をもたらす⁹¹⁾」と語る『聖書』の神言に、「一条の光明を見出し、敢て「現実の生」に迫り、その内実を变革する「人間の使命」を、文芸復興の礎に据えるのである。

(9) 魂の不滅 (Unsterblichkeit der Seele)

一回限り生きた魂が、「幸福なき完成 (die selige Vollendung)」(第二九二句)へと至ることを、これが魂の不滅 (Unsterblichkeit der Seele) である。この「完成」を目指して円現せんと、詩人は筆を走らせ、盟友を募らんとする。

Ⅲ das überlebende Verlangen

Ⅳ verkündigte der Seelen Bund.

Ⅴ 永世への祈念が

Ⅵ 諸人の魂の盟約を告げたのだ。

(『芸術家』第二〇八句—第二〇九句)

不滅への意志は啓蒙期当時、限りなき進歩を頼む思想として躍進し、シラーの『芸術家』もこの進歩思想を唱導した西欧十八世紀の成果と見ることが出来る。つまり「人間の心は、諸々の新たな衝動に突き動かされ」(第二六七句)、この衝動が、「芸術家よ、汝らの創造圏を拡大してゆく (erweitern euren Schöpfungskreis)」(第二六九句)と、歌われている通りである。但し、無限の進歩とは『芸術家』の場合、古典芸術に倣い崇高美を倦むことなく探求し続けることであって、近代科学の理論理性がもたらす飽くことなき知識欲の帝国拡張とは趣を異にするものである④。

つまり魂の不滅とは、恒に一意専心に問い求められるべきものであって、自己の手に積み重ねられ貯蔵されるものではない。従って、現実には滅びた古典文化を心の底に探りつつ、常に既成の自己の殻を破り、彼方へと越えてゆくことになる。この様な魂の動きを示すのが、『芸術家』で好んで用いられている比較級の用法と考えられる⑤。

Je weiter sich Gedanken und Gefühle

dem tüppigeren Harmonienspiele

Ⅶ dem reichern Strom der Schönheit aufgethan —

…

Ⅷ durch immer reinre Formen, reinre Töne,

Ⅸ durch immer höh're Höhn und immer schön're Schöne

der Dichtung Blumenleiter still hinauf —

Ⅹ ますます広汎に思想と感情が

Ⅺ ひとしお豊かな調和の流れとなり

Ⅻ より満ちた美の大河へと開かれる —

…

Ⅼ 恒に一層と純粋な形式と、一層と純粋な音調により

Ⅽ 恒に一層と高き高みを通り、そして恒に一層と麗しき美を貫き

Ⅾ 詩歌の花の諧は静かに立ち昇りゆく —

(『芸術家』第四一三句—第四一八句)

シラーの表現は殊に『芸術家』において文字通り、「恒に一層と高き高み (immer höh're Höhn)」(第四二七句)を指す上昇気流に乗っており、下を垣間見たならば不安に駆られそうである。かくして問い求める真摯な魂の不滅への祈念は、宙に浮いてしまっている。

後世の抒情表現、殊に現代詩歌においては、このシラー流の高揚感は実に疎遠なもの、つまり「高邁」な過去の遺物と化している感がある。そこで『パンと葡萄酒』は既にこの趨勢を懸念してか、『芸術家』の二の舞は踏まない。確かに「魂の不滅 (Unsterblichkeit der Seele)」が「要請 (Postulat)」⑬される道筋は残っていないよう。但し人知の有限性を自覚し、「仮象」を求めうかつに「高みへと落ちこむ」(註(11))ことを慎しみ、着

実で地道な筋を辿らねばならない。従って『パンと葡萄酒』では全体に控え目に高揚感が抑制され、止み難い奥底からの心の動きを前提としてのみ、しかも悲劇性を帯びて壮絶な雄飛へと向かう場台にだけ、敢て「至福なるギリシア」(第五五句)と「永世への祈念」が声明となり、「魂の不滅」への問が発せられるのである。

⑩ 盟約 (Bund)

先に人倫 (Stillichkeit) が美の究極となる『芸術家』の観点には言及したが、実はこの人倫の要となり、更に「永世への祈念」にも繋がるのが、「盟約 (Bund)」だと思われる。

㉔ so fliebt in Einen Bund der Wahrheit
in Einen Strohm des Lichts zurück!

㉕ かく滔々と真理の唯一の盟約の中へ
一条の光の大河へと回帰するのだ!

(『芸術家』第四八〇句—第四八一句)

全四八一句の長詩はこう結ばれている。天地創造の終結なして「光明への復帰 (Wiederkehr zum Lichte)」(第六八句) が話題となるように、人倫の目指す所は新たな盟約である。『芸術家』とは就く古典ギリシアとの新たな盟約を礎として、「真理と人倫を美に包む」(註(18)) ことを提唱する作品と考えられる^㉖。

ここで古典ギリシアとの新たな盟約が問題となる以上、既に旧き盟約が前提とされている。旧約とは即ち、かつて古典ギリシア芸術を偶像として破壊した「ねたむ神 (エール・カンナー)」^㉗との盟約を意味する。これは『旧約聖書』で選民モーセに唯一の神として、「我在りて在る者ぞ (エ

ヒイエ・アシエル・エヒイエ)^㉘」と語った、非寛容な神権であるが、更に史上この「ねたむ神」は容易に、異端撲滅に血道をあげた過去の西欧封建体制、殊に宗教裁判で悪名高い専制絶対主義国家十六世紀スペイン王国に結びつく。例えばシラーの悲劇や史書がこのことを扱っている^㉙。

㉚ da schnürte heil'ge Mordsucht keine Flamme,
da rauchte kein unschuldig Blut.

㉛ ここでは神聖なる殺意が、炎を掻き起こすこともなく、
ここでは如何なる無垢の血も、祭壇で煙ることがなかった。

(『芸術家』第八〇句—第八一句)

「そこ (da)」とは、就く十人十色の「ギリシアの神々」の世界であるが、それと好対称をなしているのが、「神聖」だが「野蠻」(註(8))な専らキリスト教一色の旧体制 (ancien régime) 下西欧に他ならないのである。

故に「盟約」とは、『芸術家』や『パンと葡萄酒』の場合、近世市民社会での新たな契約 (Contrat social)^㉜をも指し、例えば『芸術家』第三部での脈絡は、「奴隷の上にも今や人権が宣言された (über Sklaven sprach jetzt Menschenrecht)」(第三七六句)と歌われる。すると『芸術家』公刊後数ヶ月にして勃発したフランス革命(一七八九年七月)における人権宣言(同年八月)も、この盟約の一環と看做されそうだが、あくまで当の宣言が理性の専制を許容する限りそうはならない。なぜなら新たな盟約は、まず「感性の難路を辿り」(第六九句)、「(感性) 美の曙光なす門を通りてのみ (理性) 認識の国土へ」(第三四句—第三五句)と踏み入るからである^㉝。

ならば逆に、「美」の専制(唯美主義)が今度は、『芸術家』もろとも旧き盟約へと復古する危険が生ずる。つまり詩歌象徴の「仮象」の世界は、

居直って自己の絶対性に閉じてしまい、政治社会など他の外界に盲目となる。ここにも、『パンと葡萄酒』で「乏しき時代の詩人」が「盟友なく (ohne Genossen)」（第二二〇句）と歌われるゆえんがある。すなわち革命に背を向けたシラーとゲーテとの盟約、「ヴァイマル古典主義により実現した審美的反動 (von der Weimarer Klassik bewirkte ästhetische Restauration) ⑧」とは異なり、フランス革命の途上に共和制・民主主義國家の実現を信じ、この市民社会形成に相応しい『英雄交響曲』（一八〇四年）の如き響きを奏でんと、ヘルダーリンはあらゆる専制を望まず⑨、故に旧約を破り新約を樹立したキリストを、『パンと葡萄酒』で古典ギリシアの円熟として歌い上げ、新たな盟約を未来の彼方に遠望するのである。

(11) 自然と芸術 (Natur und Kunst)

「自然 (Natur)」と「芸術 (Kunst)」という二つの言葉は、『パンと葡萄酒』で表立って直接一度も出て来ないが⑩、詩想の内実においては双方とも重要な概念と考えられる。他方『芸術家』では、しばしば両語に出会うので、まずその用例を念頭に置いて論述を進めたい。例えば『芸術家』の始まりでは、「人間」（第一句）が「自然の主 (Herr der Natur)」（第一〇句）と規定されている。これは「自然」に対する「人間」の側からの主体的な働きかけを肯定したもので、具体的には第二部で「今や人間は自然を人間の分銅で量り (Jetzt wägt er sie mit menschlichen Gewichten)」（第二八〇句）とか、「人間は天体に自らの調和を賦与し (Leicht er den Sphären seine Harmonie)」（第二八五句）と歌われている。そして第一部に見られる、「人間よ、汝のみが芸術をもつ (die Kunst, o Mensch, hast du allein.)」（第三三三句）と云う主張を鑑みるならば、「自然の主」とは取りも直さず「芸術家」に他ならぬことになる。

ところで、他方『芸術家』は「自然の魂 (Seele der Natur)」（第一一五句）の「影 (Schatten)」（第一一七句）、あるいは「像 (Bild)」（第一

二八句）から「造形力 (Bildkraft)」（第一三三句）を獲得。従って、「自然」と「芸術」とは相互に働きかけ合い、この両者の協和により、「あらゆる美の原像 (Urbild alles Schönen) の最初の響き (Klang)」（第二一八句）が可能となる。そしてこの様に、「自然」から学び取った「像」を範として、外界の「自然」に働きかける「芸術」の目指す「あらゆる美の原像」は、既に述べたように、「人倫の日輪の軌道 (die Sonnenbahn der Sittlichkeit)」（第八五句）にあり、もしこの「原像」をプラトーン風にソークラテースの言葉で語れば、「善のイデア」（註(26)）と言ふことになる。

以上の「自然」と「芸術」との相互対話が成立する場を、『芸術家』では何処より古典ギリシアに見るのであるが、この時空を明確に目下の現実キリスト教西欧啓蒙期と峻別するまでには至らなかった。これに対し『パンと葡萄酒』でヘルダーリンは、「至福なるギリシア」を神事祝祭の祈りの場たる「神々の住居」（第五五句）と看做し、この祝祭空間において「自然」が、「^{アイトイ}アイトイして全 (Eines und Alles)」（第八四句）の隠れなき「真理 (Wahrheit)」（第八一〇句）の姿で顕現するとともに、それに即応して「芸術」の「言葉が花のごとく」（第九〇句）に開花したと歌う。他方キリスト教西欧では「芸術」も「自然」も、歴史意識の奥底で、魂の古里ギリシアに本質上隠れてしまっていると言っているのである。

従って、『パンと葡萄酒』においては、古典ギリシアを魂の淵から招来せず、「自然」も「芸術」も始まらない。そこで、そのための想起の縁が探し求められる。

異 …… aber es lebt stille noch einiger Dank.

言 Brod ist der Erde Frucht, …

異 …… だがなお静かに幾何かの感謝は生きている。

「言 パンは大地の衷り、…」

『パンと葡萄酒』第一三六句以下)

慎ましい祈り(Religio)の基調を伝える「感謝(Dank)」(第一三六句)を媒介として、「至福なるギリシア」を終結し宥和した神人キリストに因む、「パン(Brod)」(第一三七句)と「葡萄酒(Wein)」(第一三八句)が、魂の古里からの贈物として言及される。即ち『パンと葡萄酒』においては、「自然」も「芸術」も祈りの場で始めて問われることになり、ヘルダーリンは「芸術」をむしろ「自然」な恵みと考え、『芸術家』におけるシラーのように「人間がこれを為したのだ(Das hat der Mensch gethan)」(第一六六句)と謳歌するのを差し控えるのである。

(12)夜(Nacht)

時代の夜を意識しつつ、光明な古典ギリシアへと突き抜ける、『パンと葡萄酒』や『ファウスト』⁸⁾の詩想展開を鑑みると、『芸術家』には、この様な「夜」の意識が表立って現われていないのが目につく。すなわち基調が啓蒙思潮に適う『芸術家』では、「理性により自由」(第七句)となる近世西欧の現実が肯定される。但し、これは野放しの肯定ではなく、何より「感性の難路」(第六九句)が理性の歩むべき道とされ、この「難路」を辿り「思想が躍り出た(der Gedanke / sprang)」(第一八五句以下)と考えられる精神界ギリシアが範となる。

「現実の生(Leben)」(註(5))そのものが、一面では闇の「牢獄(Kerker)」(第七七句)とも考えられるが、他面シラーの場合、それを「牢獄」と化した近世西欧の野蛮な史実の方が、念頭にあると思われる。就くそれは、「神聖なる殺意(heil'ge Mordsucht)」(第八〇句)が君臨した非寛容な宗教裁判の時代で、啓蒙期とは、この闇夜の時代につき、曙光なす光の世紀(Le Siècle des Lumières)に他ならない。そしてこの脈絡は類比

により、「夜の黒い面纱に被われた不可測の世界(ein unermessner Bau, im schwarzen Flor der Nacht)」(第一〇五句)から、造形見事な芸術時代が誕生した歴史への回顧となる。蓋し古典ギリシア時代の芸術に関して、シラーは明かるい側面にのみ注目しているのではなく、それが「弧線」を更に未来の夜を貫き(den Bogen weiter durch der Zukunft Nacht)」(第一四五句)で引き伸ばし、広く生死の両面にまたがる点にも留意している。この様に古典ギリシアは、夜から生まれ夜へと延びる光明の世界として、『芸術家』では表象されており、当の光明界は「パンと葡萄酒」でも同じく、夜から夜への過程で、中央部「ギリシアの昼」として扱われることになる⁹⁾。

更にシラー自身の直面していた、西欧十八世紀啓蒙期を念頭に置いた『芸術家』第三部では、「夜(Nacht)」が孕む「謎(Rätsel)」(第四一九句)の深みが、「高貴な形式(die hohen Formen)」(第四一八句)と並置される。

… die hohen Formen dann vollenden,

je schöne Rätsel treten aus der Nacht,

☞ je reicher wird die Welt, …

… 高貴な形式をそこで完成し、

一層と美しい謎が夜から立ち現われ

☞ 弥々世界は豊かになり、…

『芸術家』第四一八句—第四二〇句)

ここで「高貴な(造形)形式」の古里は、取りも直さず古典ギリシアであるが、その「形式をそこで完成し」たとしても、なお汲み尽くし難い「夜」の深淵に受容されれば、「一層と美しい謎(je schöne Rätsel)」とつづ

継承され得ることになる。この様に、新たな「現実の生 (Leben)」(註(5))へと踏み入るや、古典芸術は自己に閉塞し得ぬ開かれ生きた連関の中に入るのである。

但し、かく『芸術家』において意味深長に解された「夜」の詩想を、實際の詩歌象徴そのもので直接に西欧の現実[・]に適用したのはシラーでなかった。それはドイツ思想詩の歴史において、『芸術家』公刊後十年程にして誕生した抒情性豊かな両作品で、まずノヴァーリスの『夜の讃歌 (Hymnen an die Nacht)』(一八〇〇年刊)において、「一層と美しい謎が夜から立ち現われ (je schönre Räthsel treten aus der Nacht)」と、西欧キリスト者の意識の根を「夜」の大地においてしかと擲んだ。そして、この直後『パンと葡萄酒』でヘルダーリンが、「夜」(第一部)から「ギリシアの昼 (第二部)」をへて「西欧の夜」(第三部)へと張られた心の琴線に触れ、西欧意識の「弧線を更に未来の夜を貫き」て引き延ばしたのである。

註解 (Anmerkungen)

* 『芸術家』は初稿(一七八九年刊)を礎とし、底本ヴァイマル版シラー全集(一九四三年以降)第一巻(二〇二頁―二四頁)より、『パンと葡萄酒』はシュトゥットガルト版ヘルダーリン全集(一九四六年―八五年)第二巻(九〇頁―九五頁)より引用。

(1) 序言 (Vorwort)

(一) 『ヘルダーリンの西歐ギリシア論』〔一〕シラーの問題提起(1)〜(7)／〔二〕古典ギリシアとキリスト教西歐(1)〜(5) (一九八四年度・高知大学学術研究報告、第三三巻、人文科学篇、縦組一三頁―七三頁)。〔二(6)〜(7)／三〕神話の神(1)〜(9) (一九八五年度、第三四巻、縦組二頁―七二頁)。〔三〕(10)最深の親密性(一九八六年度、第三五巻、縦組一頁―六六頁)。

「はじめに」において述べたように、ハイム著『ロマン派』(初版一八七〇年)第三書『浪漫主義最盛期』第一章(二八九頁―三三四頁)のヘルダーリン論(第四版、一九二〇年、三四二頁―三七六頁)の表題『浪漫詩文の傍系』(初版二八九頁／第四版三四二頁)が示す方向は、デイルタイ著『体験と創作』(一九〇五年)所収のヘルダーリン論で批判(第八版、一九二二年、三九六頁)されながらも根強くベツォルド著『ヘルダーリンの『パンと葡萄酒』』(一九六六年―九七年)や、シュミット著『ヘルダーリンのエレギー』『パンと葡萄酒』(一九六八年)において、『芸術家』などシラー抒情詩の雄篇へと『パンと葡萄酒』の詩想が関連させられなかった遠因となっている。またヴェント著『ヘルダーリンとシラー、比較文体論』(『ゲルマニア研究』第七〇号、一九二九年、複刊一九六七年)四六頁には、『芸術家』第二五一句の「カストールに寄りかかる、輝くポリュデウケースの姿」への言及があるけれども、但しあくまで当論の副題通り「比較文体論 (Eine vergleichende Stilbeachtung)」の限りの言及であり、しかも此所で関連させられるヘルダーリンの作品は、『初期テュービンゲン時代一七九〇年頃の抒情詩』『詩歌女神への讃歌 (Hymne an die Muse)』『つまりシラーの影響が直接に読み取れる未熟な詩歌に

限られている。他方グロッセ著「シラーの『芸術家』一七八九年」(一八九〇年)に、ヘルダーリンの言及が見られないのは、一九世紀末に例えば『パンと葡萄酒』全九節が漸く一八九四年公刊なのであるから、シラー研究家の側からヘルダーリン詩歌へと歩み寄る可能性は一層と低かったと考えられる。

(2) シュトゥットガルト版ヘルダーリン全集、第四巻、二三八頁。論文『音調の転移』。

(2) 三部構成 (Triade)

(3) 中央部が『芸術家』の場合は第九一句―第三五〇句と、『パンと葡萄酒』の場合は第四節―第六節と考えられる。左記の表を参照。

		『芸術家』		『パンと葡萄酒』	
		初稿	改稿		
第一部	句	1〜90		1〜54	
	節	一―七	一―七	一―三	
第二部	句	91〜350		55〜108	
	節	八―二四	八―三三	四―六	
第三部	句	351〜481		109〜160	
	節	二五―三三	二四―三一	七―九	

『芸術家』改稿は、底本シラー全集、第二巻、第一部、三三三頁―三九六頁を典拠とした。

(3)ギリシム (Griechentum)

(4) 詳細は『ヘルダーリンの西歐ギリシア論』(三)神話の神 (10) 最深の親密性 (註(一))。

(5) シラー全集、第二巻、第一部、三六七頁。

(6) 『ギリシアの神々』初稿、第一九節、第一四七句(シラー全集、第一巻、一九四頁) / 再稿、第二節、第九一句(全集、第二巻、第一節、三六六頁)。

(7) カント『純粋理性批判』初版、一七八一年、六四二頁以下 / 再版、一七八七年、六七〇頁以下(アカデミー版作品集、第三巻、四二六頁以下) 参照。引用は第三巻四二七頁より。

(4)キリスト (Christus)

(8) 『ギリシアの神々』初稿、第一五節、第一二三句以下。シラー全集、第一巻、一九三頁。

三 聖霊たちの怖ろしい立法により

三 裁きを下す神聖なる野蠻人は居なかった。

三 「居なかった」所が古典古代ギリシアである。

(9) 『理想と人生』(一八〇四年)『シラー詩集』第一部再版) 第三節、第三〇句「理想の国」 / 第二五節、第一四五句以下「現世の重き幻像」(全集、第一巻、第一部、三九七頁 / 四〇〇頁)。当該詩歌初稿は『幽魂の国』(一七九五年『時神』刊)でその第四節、第四〇句に「美の幽魂の国」 / 第一八節、第一七五句以下に「現世の重き幻像」(全集、第一巻、二四八頁 / 二五二頁)とある。因みに一八〇〇年『シラー詩集』第一節初版で当該詩歌の表題は「形相の国」となっている。

(10) 一七八九年三月三日ケルナー宛書簡(全集、第二五巻、二三八頁)によると、註(一)グロッセ註解九三頁以下にも例証されている通り、シラー自身は、カストールの可死性とポリュデウケースの不死性には重点を置かず、この兄弟をむしろ「生」と「死」の人格化象徴と看做して当の明暗に着眼しているのであるが、この様なシラー自身の意図はともかく、少くとも後世ヘルダーリン達に『芸術家』が受容され

てゆく過程では、本論のようにキリスト像に関連させるのも無理はないであろう。

この他「松明をかざす者」に関しては、まずノヴァーリス作「夜の讃歌」(一八〇〇年『アテネウム』刊)第五歌に現われる「死」の詩歌象徴、「優しき若者が光を消し翹ぐ(Ein sanfter Jüngling löscht das Licht und ruht)」「(四巻本著作集、一九二九年、第一巻、六〇頁)が留意され、これが「われら(ギリシア人の墓地に沈思して立つ若者(Der Jüngling ... der ... / Auf unsern Grabern steht in tiefem Sinnen)」「(第五歌、同巻六二頁)としてキリスト像へと繋げられ、「この死の只中に永遠の生命が告げられた(In Tode ward das ewige Leben kund)」「(同六二頁)と歌われている詩想が注目される。実は『パンと葡萄酒』も「夜の讃歌」も共に、「ギリシアの神々」初稿の第一四節(シラー全集、第一巻、一九三頁)を踏まえており、当該詩節にて「恐怖の骸骨(Graßliches Gerippe)」「(第一〇五句)との対比の下に浮かび上がる、「静かに物悲しく松明を下した靈威(Still und traurig senkt ein Genius / seine Fackel)」「(第一〇八句以下)に象徴される古典ギリシア世界が、「神聖なる野蠻人」(註(8)第一一四句)と好対称をなす。因みに当の「死の表象」における、「骸骨(Skelet)」「か「若者」かと言ふ二者択一を、古典古代と西歐近代との明暗の下に際立たせたのは、レッシング著『ラオコオン』(一七六六年)第十一章の註記(一九二五年刊二五部作品集、二五巻一九七〇年複製、第四部、第四巻、三四六頁以下)と、これに関連して書かれた論文「いかに古典古代人は死を形造りしか(Wie die Alten den Tod gebildet)」「(一七六九年)であり、「ぞ」とする骸骨を再び放棄すること」『ラオコオン』第十一章に重ねて強調する当該論文の末尾は、次のような印象深い言葉で締め括られている。作品集、第一七部、第一五巻、三五六頁。

誤れる理解に基づき宗教のみが、私達を美から遠ざけ得る。もし宗教が私達を再び美へと連れもどすなら、それは真正な宗教、つまり正しく理解された真正な宗教の証左なのである。

この様にレッシング始めシラーたちが立論する折に念頭に置いた理念が、ヴィンケルマン著『絵画と彫刻における古代ギリシア芸術作品模倣論』(一七五五年)第八

八章の命題、「高貴なる純朴と静かな偉容 (Die edle Einfach und stille Größe)」(一八二五年)／二八年刊二卷全集、復刻一九六五年、第一卷、三四頁)であったことも此所に付記しておきたい。

(11) ヘルターリン『省察』。全集、第四卷、二三三頁。「覚醒が汝を去る所が靈感の限界なのだ。…深みへと落ちこむのと同様に、高みへと落ちこむこともあり得る。」

こう言う「高み」と「深み」の表裏関係を、カントは『天界の一般自然史と理論』(一七五五年)第三部「補遺」の終結部(註(7) 作品集、第一卷、三六六頁)において、「地球」と「火星」が代表する「危険な中間地点」に見出し、この「危険」の理由として、「正に同じ長所が、精神を低位階を越えて高め、高みへと据え」と共に、その高みから精神は当の低位階の下へと、一層深く再び無際限に転落し得る」ことを挙げている。

(12) 『ファウスト』終結部、第二二一〇句以下。ハムブルク版作品集、一九八二年、第三卷、三六四頁。「永遠の女性が / われらを天上へと引きあげる (Zieht uns hinan)。』

(5) 創造の終結 (Vollendung der Schöpfung)

(13) 『イザヤ書』第六三章、第一六節「我らの父」など。

(14) 『ローマ人への手紙』第四章、第一七節。「死者を生かし、無(メー・オンタ)から有(Buzza)を呼び覚ます神」

(15) 『パンと葡萄酒』第九節の一四九句「神の子たち (Kinder Gottes)」(全集、第二卷、九五頁)など、『聖書』への関連に詳しいベッソールド註解(註(1))の該当箇所(二二八頁)には、話題の二二六句以下に關して「聖書」への言及なく、そのかわりに余り本質的とは思われないオウィディウス作『転身物語』第一書の第一四九句以下が引用されている。

… 処女(神)も、殺戮の血潮にぬれた大地を、神々の最後を飾り、(この正義の処女神) アストライアーも去りゆく。

(トウスクルム叢書、一九五二年、一四頁)

これに対して註(1)シュミット註解の二二九頁には『聖書』の常套文句」として当二二七句に關し、『歴史史下』第三〇章の第九節で「神 (Gott)」が「その面 (sein Angesicht)」を「背ける (wenden)」等の引用があり、更にヘルターリンの後期讃歌「バトモス」初稿(一八〇二年)第一〇節における表現、「その面を至高の神が背ける (sein Angesicht / Der Höchste wenden)」(第一五七句以下。全集、第二卷、一六九頁)が関連づけられている。

(16) 『ファウスト』最終場(天使の言葉)第一一九三六句以下。作品集、第三卷、三五九頁。ゲーテが強調した当二句は、隔字体で表現されている。
Wer immer strebend sich bemüht,
Den können wir erlösen.
つねに努力し骨折る者、
その者をわれらは救済し得る。

(6) 美神ウーラニア (Urania Aphrodite)

(17) 『人間の審美教育について』(一七九五年)第六書簡。シラー全集、第二〇卷、三三四頁。プラトーン『饗宴』一八五Cで「キュテレイア」は「俗衆の(パンデーモス)」の意。

(18) シラー全集、第二五卷、一九九頁。

(19) 『ドイツの偉容』(註(32))。シラー全集、第二卷、第一部、四三二頁。
縦んば(王侯の神聖ローマ)帝国(九六二年—一八〇六年)が減んだとて、ドイツの尊厳は揺らがず悠然と留まろう。その尊厳は人倫の偉容 (eine sittliche Größe) であり、それが住まうのはその国の文化と気質である。

(20) シラー全集、第二卷、第一部、三九八頁。話題の第八節に相当する箇所は、『幽魂の国』(註(9))第十一節、第一〇七句—第一一〇句(全集、第一卷、二五〇頁)である。

(21) 作品集、第三卷、五九頁。

(22) 『素朴文学と情感文学について』(一七九五年—一九六年)。シラー全集、第二〇卷、四五三頁。此所では「思想そのものが詩歌象徴 (der Gedanke selbst, poetisch)」となり、「取り扱う概念を純粹かつ完全に理念へと引き上げたが如き詩歌」が待望されている。

(23) 筆者の別論、『パンと葡萄酒』冒頭の都市像(一九八三年度・高知大学学術研究報告、第三二卷、人文科学篇、縦組二一頁—七〇頁) および、内省と光明—『パンと葡萄酒』第一節「聖なる夜」その一(一九八五年度・高知大学学術研究報告、第三四卷、人文科学篇、縦組一五五頁—二〇二頁)の両篇を参照。

(24) 筆者の別論、『パンと葡萄酒』第一節「聖なる夜」その二—「四」思慮深い家長(一九八六年度・高知大学学術研究報告、第三五卷、人文科学篇、縦組六七頁—一〇二頁)、および当論の欧文骨子にあたる、日本独文学会編『ドイツ文学』第七三号(一九八四年秋)八三頁—九一頁(LANDAUEB — „ein sinniges Haupt“ in Holderlins „Brod und Wein“)参照。

(7) 人倫と美 (Stiftlichkeit und Schönheit)

(25) ニーチェ『ツァラトゥストラはこう語った』第一部(一八八三年)第一章「三段の変容」において、西欧キリスト教倫理を一言で以て蔽ったもの。批判版全集、第六部、第一卷、一九六八年、二二六頁。

(26) 『国家論』五〇五A (*für den Anfangs Ideen*)。

(27) 『第十五審美教育書簡』。シラー全集、第二〇卷、三五九頁。

それは優美でも尊厳でもありません。…

それは両者のいずれでもありません。なぜなら、それは同時に両方だからです。

他に『優美と尊厳について』(一七九三年)参照。シラー全集、第二〇卷、二五一頁以下。

(28) ホラーティウス『詩論』第三三三句「詩人は為になるか楽しませようとする (aut prodesse volunt aut delectare poetae)」の関連の発言は『ヒューーリオン』第一卷(一七九七年)の序言(ヘルダーリン全集、第三卷、五頁)参照。

一九(19) 『芸術家』(一七八九年)と『パンと葡萄酒』(一八〇〇—一八〇一年)(高橋)

わが(言の)葉の芳香をのみ嗅ぐ人は、これを知らぬ人であり、また単に教えを求めて、これを摘む人もまた、これを知らぬ人である。様々な音調の対立が或る色調で協和するのは、単なる思弁のためでも、空虚な娯楽のためでもない。

(29) 一七九二年五月二五日ケルナー宛シラー書簡。シュトルツ著『詩人シラー』(一九五九年)二二三頁より引用。

僕が坐って或る詩歌を創作しようとする、その内容に関する明晰な概念よりも、遙かにしばしば僕の心に思い浮かぶのが、その詩歌の音楽的なものだ。他方の明晰な概念に関しては、まず折り合いがつかないのが僕自身しばしばなのだけども。

他に一七九六年三月十八日ゲテ宛シラー書簡(アルテミス記念版ゲテ全集、第二〇卷、一九五〇年、一六五頁)に「音楽的情操」とある。

或る種の音楽的情操 (Eine gewisse musikalische Gemütsstimmung) が先行し、この後で私の場合には漸く詩的理念 (die poetische Idee) が続きます。 (30) 一八〇二年十二月二日ペーレンドルフ宛ヘルダーリン書簡二四〇。全集、第六卷、四三三頁。

(31) ハーラクレイトス『断片』一一九 (*ἦθος ἀνεστρατοῦ δαίμων*)。断片集(第六版)第一卷、一七七頁。

(32) 『ドイツの偉容』(註(19))。

(8) 文芸復興 (Renaissance)

(33) 教父アウグスティヌス(三五四年—四三〇年)におけるプラトーン哲学、神学博士アクイナス(一二二五年—七四年)におけるアリストテレス形而上学を考れば良い。

(34) 『悲劇の誕生』(一八七二年)第十二章。註(25)批判版全集、第三部、第一卷、一九七二年、七一頁。直接のソークラテース批判は、第十二章(同巻、七七頁—八四頁)以下。

(35) 『理想と人生』第一部冒頭。シラー全集、第二卷、第一部、三九六頁。当詩歌

の初稿『幽魂の国』(註(9)) 第一節冒頭 (Ewig klar und spiegelrein ...) は、全集、第一巻、二四七頁参照。

(36) 『宗教論 (Über Religion)』(一九九九年)。ヘルダーリン全集、第四巻、二八一頁。

神話の神 (Gott der Mythe) …… かくして全ての宗教の本質は詩歌象徴となるのである。

神話の神キリスト像の詳細は、註(1) 『西欧キリシヤ論』『三神話の神』(註(4))、および筆者の欧文論文、Die Christusegestalt in Holderlins „Brod und Wein“ (一九八九年度・高知大学学術研究報告、第三八巻、人文科学篇、第一分冊、横組一頁―四六頁)。

(37) ビンダロス断片六三A B 『アテーナイ人達に』(トゥスクルム叢書、一九六七年、四一―四頁以下)

(38) シラー全集、第二五巻、一八七頁。註(1) グロッセ註解では、ゲーテ晩年の詩歌「若者よ、銘記せよ (Jüngling, merke dir, ...)」…… 詩神は案内をも、導きをも心得ぬことを (Daß die Muse zu begleiten, / Doch zu leiten nicht ver-steht.) (註(12) 作品集、第一巻、三三三頁) が引用され、同主旨の例証として、

該の書簡も話題とされ、「秋ではなく、春にシラーが芸術家の姿を喩えてゐる」(三七頁) という点が力説されているけれども、但しシラーの場合は自国の文化を「黄金の果実 (die goldne Frucht)」とか、「收穫の果実 (Frucht der Aernte)」と呼んだ断片草稿『ドイツの偉容』(註(19)) があることも見逃せな(全集、第一巻、第一部、四三二頁以下)。

ドイツ人の威厳は、決して王侯の頭上に存しなかった。…… 縮んば帝国が滅んだとて、ドイツの尊厳は揺らぐが悠然と留まろう。その尊厳は人倫の偉容であり、それが住まうのはその国の文化と気質なのである。

…… そして政治の国が揺らぐや、精神の国は弥々堅固で、一層と完成した形となったのである。…… (四三二頁/四三三頁) …… そしてこの極めて運鈍(ドドイツ) 国民が、全ての性急で俊速な諸国民に追いつくであろう。他の諸国民はそ

の時には落花した。その落花の折に、黄金の果実が残り、自己形成し、收穫の果実はふくらむ。

(39) 『詩篇』第一歌、第三句など。

(40) 『ヨハネ福音書』第二章、第二四節。

(9) 魂の不滅 (Unsterblichkeit der Seele)

(41) 『天界の一般自然史と理論』(一七五五年) 第二部におけるカントの宇宙論、「止むことなき」創造の漸次完成 (die successive Vollendung der Schöpfung)」(註(7) 作品集、第一巻、三三二頁) も、この脈絡を物語していると思われる。

(42) 類似の比較級の用法は、『パンと葡萄酒』第二節の第三五句にも、「満満と溢れる杯 (vollern Pokal) や、弥々果敢なる生 (kühneres Leben)」(全集、第二巻、九二頁) とあるが、こういう比較級の巧みな使い方は、まずクロフシュトックの詩歌象徴に確かめられる。例えば頌歌『チューリヒ湖 (Der Zürchersee)』(一七五〇年) 第一六節の第六一句以下 (一七七一刊『頌歌集』復刻一九七一年、一二〇頁)。

Aber süßer ist noch, schöner und reizender,

In dem Arme des Freunds wissen ein Freund zu seyn!

だが一層と甘美で、より麗しく魅惑なのは、

友の腕にて、親友たるを知ることなのだ、

(43) カント『実践理性批判』(一七八八年) 第一部、第二書、第二章、その四「純粋実践理性の要請たる魂の不滅」三三〇頁。註(7) 作品集、第五巻、一二二頁。

この無限の進歩 (Progressus) はだが、一重に、同じ理性存在者の実存と人格個性が、無限の只中へと持続 (fortdauernd) してゆくこと——これが魂の不滅と呼ばれる——を前提としてのみ可能である。かくして最高善 (das höchste Gut) は実践上、ただ当の魂の不滅を前提としてのみ可能であり、故に魂の不滅は、道徳律 (das moralische Gesetz) と不可分に結びついたものとして、純粋実践理性の要請 (ein Postulat) なのである。

(10)盟約 (Bund)

- (44)既に註10)で言及した、ヴィンケルマン著『古代ギリシア芸術模倣論』(一七五五年)を筆頭に、レッシングの『ラオコオン』(一七六六年)とか、ゲーテの『イフィゲーニエ』(一七八七年)などが、『ギリシアの神々』や『パンと葡萄酒』の先達となっている。このドイツにおける古典ギリシアの発見に関しては、註(1)『西欧ギリシア論』(『古典ギリシアとキリスト教西欧(7)古典古代理念追求』において、筆者は次のように論述した。一九八五年度・高知大学学術研究報告、第三四巻。成程古典古代は一部の識者の教養財として、幾多の姿を取り西欧キリスト者の世界を飾っていた。だがそれは数多くの絢爛豪華な富の一部を形造るに過ぎず、西欧キリスト者の意識が古典ギリシアへの止み難き依存関係へと凝集し、ここから現存の「至福」探求が焦眉の急として追求されるには、正にこのヴィンケルマンの『古代ギリシア模倣論』の筆力を待たねばならなかった。もはや古典古代は、アリストテレス『詩学』の規範だとか、エウリーピデースの戯曲にあらわれた微妙な表現上の作法に拘泥することなく、むしろその本質から問われ、西欧キリスト者は真正面から古典ギリシアと向きあいつつ、自己の現存の根本問題を古典への問いに投入するのである。余断なきこの現存探求の修羅場、かく「新たに燃え上がる実有に関する巨人の戦闘」の只中では、古典学者の博識が単なる知的遊戯衝動へと安直な傾斜を示さぬよう、絶えず求道者の真向な問いかけが見張っているのである。(第三四巻、人文科学篇、縦組七頁)
- (45)『出エジプト記』第三四章、第一四節。
- (46)『出エジプト記』第三章、第一四節。
- (47)シラーの史劇『ドン・カルロス』(一七八七年)と『オランダ独立史』(一七八八年)。
- (48)ルソー『社会契約論』(Du Contrat Social)](一七六二年)「普遍意志の至高の指導 (La suprême direction de la volonté générale)」(フレヤード版ルソー全集、第三巻、一九六四年、三六一頁)。
- (49)ルソー『告白』第一書(一七八二年)「私は考える前に感じた (Je sens avant de penser)」(全集、第一巻、一九五九年、八頁)参照。

二一(21) 『芸術家』(一七八九年)と『パンと葡萄酒』(一八〇〇—一八〇一年)(高橋)

avant de penser)」(全集、第一巻、一九五九年、八頁)参照。

(50)バイオーニ『古典主義と革命』(Classicism e Rivoluzione)](一九六九年)第五章。ヴァイマル版『ゲーテ年鑑』第九二巻(一九七五年)七三頁—一二七頁(ケスター独訳)八三頁。

疾風怒濤から初期ロマン派の若き旗手へと受け継がれた彼の進歩的で革命的な醜態を何もかも排斥する傾向。

(51)ヘルダーリン『エムペドクレスの死』初稿、第一四四九句。全集、第四巻、六二頁。

今や既に王(Könige)の時代ではないのだ。

(11)自然と芸術 (Natur und Kunst)

(52)他方ヘルダーリンには、頌歌『自然と芸術、あるいはサートゥルヌスとユーピテル』(全集、第二巻、三七頁以下)があるが、いまだ箴言風の教訓調が拭い去れていない。

(12)夜 (Nacht)

(53)『ファウスト』第一部(一八〇六年)冒頭の「夜」(第三五四句—第八〇七句)から、第二部(一八三三年)第二幕「古典古代風ヴァルブルギスの夜」(第七〇〇—第八四八七句)をへて、第三幕のヘレネー悲劇(第八四八八句—第一〇〇三八句)への筋を、考え併せると良い。作品集、第三巻、九頁以下。

(54)註(3)に表で示された「第二部」が「中央部」の「ギリシアの昼」にあたる。

平成九年(一九九七年) 九月 一日受理

平成九年(一九九七年)十二月二十五日発行

Ich werde sein der ich sein werde.

Vgl. Die böhmische Rotlev-Bibel(Wenzelbibel). Nürnberg. 1455. Faksimile der Wiener Prachtausgabe im Besitz der Württembergischen Landesbibliothek.

Ich bins der ich bin· (Exodos. 3. 14)

Vgl. Mentelin, Johannes „Deutsche Bibel“ Straßburg. 1466: Die erste Deutsche Bibel. Bd.3(Genesis/Exodos/Leviticus) hrsg. v. Kurrelmeyer, W. gedr. für den Litterarischen Verein in Stuttgart. Tübingen. 1907. S.228.

Ich bin der ich bin· (Exodos. 3. 14)

Vgl. De Keulse Bijbel (=Die Kölner Bibel) 1478/1479. Faksimile-Neudruck. Amsterdam/Alphen aan den Rijn / Hamburg. Verlag Buijten & Schipperheijn / Repro Holland / Friedrich Wittig Verlag. 1979.

ick by die ick bi·

Vgl. La Bible de Robert Olivetan. Neuchâtel. 1535. Im Besitz der Württembergischen Landesbibliothek: Je suis qui suis.

Vgl. The Geneva Bible. 1560. Im Besitz der Württembergischen Landesbibliothek: I AM THAT I AM.

47)Schiller „Don Carlos“(1787)/„Geschichte des Abfalls der Vereinigten Niederlande von der spanischen Regierung“(1788)

48)Rousseau, Jean-Jacques „Du Contrat Social“(1762) Livre I. Chapitre 6: Œuvres complètes. Bibliothèque de la Pléiade. Paris. Gallimard. Tome 3. 1964. S.361.

Enfin chacun se donnant à tous ne se donne à personne, ... Chacun de nous met en commun sa personne et toute sa puissance sous la suprême direction de la volonté générale; et nous recevons en corps chaque membre comme partie indivisible du tout.

49)Rousseau „Les Confessions“ Livre I. 1782: op. cit. ((10)48). Tome 1. 1959. S.8

Je sentis avant de penser; c'est le sort commun de l'humanité. ...

50)Baioni, Giuliano „Classicismo e Rivoluzione“(1969) 5.Kap.: Goethe-Jahrbuch. Bd.92. Weimar. 1975. S.73-127(Übersetz.: Köster, Monika). S.83.

... die Tendenz, alle jene fortschrittlichen und revolutionären Fermente zu beseitigen, die von ihrem Sturm und Drang aus an die jungen Vertreter der Frühromantischen Schule weitergegeben wurden. Diese fanden in dem von Goethe und Schiller geschaffenen ästhetischen Klima ... Der bedeutendste dichterische Ausdruck der von der Weimarer Klassik bewirkten ästhetischen Restauration ist wohl der Roman „Wilhelm Meisters Lehrjahre,“, den Goethe ... von Mai 1794 bis August 1796 schrieb. ...

51)Hölderlin „Der Tod des Empedokles“ 1.Fassung. V.1449: StA. Bd.4. S.62.

EMPEKOKLES Diß ist die Zeit der Könige nicht mehr.

(11)NATUR UND KUNST

52)Hölderlin „Natur und Kunst oder Saturn und Jupiter“: StA. Bd.2. S.37f.

(12)NACHT

53)Goethe „Faust“ 1.Teil(1806). „Nacht“(V.354-807) / 2.Teil(1832). 2.Akt. „Klassische Walpurgisnacht“(V.7005-8487) / 3.Akt. V.8488-10038: HA((4)12). Bd.3. S.9-364.

54)Hölderlin „Brod und Wein“ Str.4-6. V.55-108: StA. Bd.2. S.91-93

indem es ihm eine Aussicht in das unendliche Feld der Allmacht eröffnet, als diesen Theil der Theorie, der die successive Vollendung der Schöpfung betrifft. ...

42) Klopstock „Der Zürchersee“ 16. Str. V.61-64: Oden. Hamburg. Johann Joachim Christoph Bode. 1771. Faksimile-Nachdruck. Bern. Lang. 1971. S.120.

Aber süßers ists noch, schöner und reizender,	61
In dem Arme des Freunds wissen ein Freud zu seyn!	62
So das Leben geniessen,	63
Nicht unwürdig der Ewigkeit!	64

43) Kant „Kritik der praktischen Vernunft“ (1788) 1. Teil. 2. Buch. 2. Hauptstück. IV. Die Unsterblichkeit der Seele, als ein Postulat der reinen praktischen Vernunft: AT((3)7). Bd.5. S.122. Z.17-25.

Dieser unendliche Progressus ist aber nur unter Voraussetzung einer ins Unendliche fortdaurenden Existenz und Persönlichkeit desselben vernünftigen Wesens (welche man die Unsterblichkeit der Seele nennt) möglich. Also ist das höchste Gut praktisch nur unter der Voraussetzung der Unsterblichkeit der Seele möglich, mithin diese, als unzertrennlich mit dem moralischen Gesetz verbunden, ein Postulat der reinen praktischen Vernunft (worunter ich einen theoretischen, als solchen aber nicht erweislichen Satz verstehe, so fern er einem a priori unbedingt geltenden praktischen Gesetze unzertrennlich anhängt).

(10) BUND

44) „Hellas und Hesperien bei Hölderlin ...“ ((1)1) (II) Das klassische Griechentum und das abendländische Christentum. (7) Die Antike als Idee: Forschungsberichte fürs Jahr 1985. Vol.34. Geisteswissenschaften. S.7 im vertikalen Druck

45) Biblia Hebraica Stuttgartensia. Deutsche Bibelgesellschaft. 1967/77, 1984. S.144. Z.17.

Eel kannaa: **כִּי יִתְּהוּ קַנָּא שְׂמוֹ אֵל קַנָּא הוּא:**

(„Exodos“ 34. 14)

Vgl. Biblia Germanica 1545((5)13). Teil 1. S.LII: Exodos. 34. 14.

Denn der HERR heisst ein Eiuerer / darumb das er ein eiueringer Gott ist /

Vgl. Septuaginta. Id est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes. Stuttgart/AΘHNAI. Deutsche Bibelgesellschaft/BIBAIKH ETAIPIA. 1935/79. Editio minor. Duo volumina in uno. Volumen I. S.146: Exodos. 34. 14.

ὁ γὰρ κύριος ὁ θεὸς ζῆλωτὸν ὄνομα, θεὸς ζῆλωτῆς ἐστίν,

Vgl. Biblia iuxta Vulgatam Versionem. Stuttgart. Deutsche Bebelgesellschaft. 1969. 3. Aufl. 1983. Tomus I. S.125: Exodos. 34. 14.

Dominus Zelotes nomen eius Deus est aemulator

46) Biblia Hebraica Stuttgartensia((10)45). S.89. Z19.

Exodos. III. 14. Ehyeh Ascher Ehyeh: **אֲמַר אֱלֹדִים אֵל מֹשֶׁה אֲדַבֵּר אֲשֶׁר אֲדַבֵּר:**

Vgl. Septuaginta((10)45). Vol.I. S.90: Exodos. 3. 14.

καὶ εἶπεν ὁ θεὸς πρὸς Μωϋσῆν Ἐγὼ εἰμι ὁ ὢν.

Vgl. Biblia iuxta Vulgatam Versionem. Tom.I. S.79: Exodos. 3. 14.

dixit Deus ad Mosen ego sum qui sum

Vgl. Biblia Germanica 1545((5)13). Teil 1. S.XXXIII: Exodos. 3. 14.

sie immer wahrer finden. ...

Vgl. „die goldne Frucht ... Frucht der Aernte“: „Deutsche Größe“((6)19).

Vgl. Goethe „Jüngling, merke dir, ...“: HA((4)12). Bd.1. S.327.

ALTERSWERKE	Sprüche	Jüngling, merke dir, in Zeiten	1
		Wo sich Geist und Sinn erhöht:	2
		Daß die Muse zu begleiten,	3
		Doch zu leiten nicht versteht,	4

Vgl. Grosse: op. cit. ((1)1). S.37.

Und wie Goethe wußte Schiller, daß „Kunst nicht die Bestimmung des Menschen“ sei. Unsere Bestimmung ist vielmehr, „uns Erkenntnisse zu erwerben und aus Erkenntnissen zu handeln“. Nicht Frucht, sondern nur Blüte ist ihm die Kunst; dem Lenze, nicht dem Herbste vergleicht er die Künstlererscheinung. ...

Vgl. Schiller „Ueber die nothwendigen Grenzen beim Gebrauch schöner Formen“(1793/1795/1800): NA. Bd.21. 1963. S.3/S.21/S.27.

Unsere Bestimmung ist, uns Erkenntnisse zu erwerben, und aus Erkenntnissen zu handeln. Zu beyden gehört eine Fertigkeit, von dem, was der Geist thut, die Sinne auszuschließen, weil bey allem Erkennen vom Empfinden, und bey allem moralischen Wollen von der Begierde abstrahirt werden muß. ... (S.3/S.21) ... Die moralische Bestimmung des Menschen fodert völlige Unabhängigkeit des Willens von allem Einfluß sinnlicher Antriebe, ... (S.21/S.27) ... Man sagt daher ganz richtig, daß die ächte Moralität sich nur in der Schule der Widerwärtigkeit bewähre, und eine anhaltende Glückseligkeit leicht eine Klippe der Tugend werde. ...

Der ununterbrochen glückliche Mensch sieht also die Pflicht nie von Angesicht, ... , ohne die Würde seiner Bestimmung zu erfahren. Der Unglückliche hingegen, wenn er zugleich ein Tugendhafter ist, genießt den erhabenen Vorzug, mit der göttlichen Majestät des Gesetzes unmittelbar zu verkehren, und da seiner Tugend keine Neigung hilft, die Freyheit des Dämons noch als Mensch zu beweisen.

39)Biblia Germanica 1545((5)13). Teil 1. Der Psalter. I. 3. S.CCXC.

Der ist wie ein Bawm gepflantzet an den Wasserbechen / Der seine Frucht bringet zu seiner zeit / Vnd seine Bletter verwelcken nicht / ...

40)Novum Testamentum graece et latine((5)14). S.271: Secvndvm Ioannem. 12.

ἀμὴν ἀμὴν λέγω ὑμῖν, ἐὰν μὴ ὁ κόκκος τοῦ σίτου πεσῶν εἰς τὴν γῆν ἀποθάνῃ, αὐτὸς μόνος μένει. ἐὰν ἔ ἀποθάνῃ, πολὺν καρπὸν φέρει. (XII. 24)

Amen, amen dico vobis, nisi granum frumenti cadens in terram, mortuum fuerit; ipsum solum manet. si autem mortuum fuerit, multum fructum affert.

Vgl. Biblia Germanica 1545((5)13). Teil 2. Euangelium Johannes. 12. 24.

Warlich / warlich / Ich sage euch / Es sey denn / das das Weizenkorn in die erden falle / vnd ersterbe / so bleibts alleine. Wo es aber erstirbet / so bringets viel Früchte. ... (Teil 2. S.CCCVI)

(9)UNSTERBLICHKEIT DER SEELE

41)Kant „Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels“((4)11) 2.Teil. 7.Hauptstück. Von der Schöpfung in ihrer Unendlichkeit: AT. Bd.1. S.312. Z.31-34.

Ich finde nichts, das den Geist des Menschen zu einem edleren Erstaunen erheben kann,

Triebbad des logischen Sokratismus gleichsam hinter Sokrates in Bewegung ist, und wie dies durch Sokrates wie durch einen Schatten hindurch angeschaut werden muss. ... Der sterbende Sokrates wurde das neue, noch nie sonst geschaute Ideal der edlen griechischen Jugend: vor allen hat sich der typische hellenische Jüngling, Plato, mit aller inbrünstigen Hingebung seiner Schwärmerseele vor diesem Bilde niedergeworfen.

35) Schiller „Das Ideal und das Leben“ ((4)9) 1.Str. V.1: NA. Bd.2. Teil 1. S.396

Ewigklar und spiegelrein ...

Vgl. „Das Reich der Schatten“ ((4)9) 1.Str. V.1: NA. Bd.1. S.247.

Ewig klar und spiegelrein ...

36) Hölderlin „Über Religion“: StA. Bd.4. S.281.

Gott der Mythe. ... So wäre alle Religion ihrem Wesen nach poetisch.

Vgl. „Hellas und Hesperien bei Hölderlin ...“ ((1)1) (III) „Gott der Mythe“ (10) „Die tiefste Innigkeit“ (Vol.35. S.1-66 im vertikalen Druck).

37) Pindaros/Pindar (Griechisch/Deutsch) hrsg. u. übers. v. Werner, Oskar. Tusculum-Bücherei. München. Heimeran. 1967. S.414/S.416//S.415/S.417.

ΔΙΘΥΡΑΜΒΟΙ 63ab ΑΘΗΝΑΙΟΙΣ DITHYRAMBEN 63ab FÜR DIE ATHENER

Δεῦτ' ἐν χορόν, Ὀλύμπιοι,

1

...

ἰοδέτων λάχετε στεφάνων τᾶν τ' ἔαρι-

δρόπων ἀοιδᾶν,

6

...

ἐναργέα τ' ἐμ' ὥστε μάντιν οὐ λαυθάνει,

13

φοινικοεάνων ὀπότη' οἰχθέντος ὤρᾶν θαλάμου

14

εὐοδμον ἐπάγοισιν ἕαρ φυτὰ νεκτάρεια.

15

S.414

τότε βάλλεται, τότε ἐπ' ἀμβρόταν χθόν' ἔραται

16

S.416

ἰων φόβαι, ῥόδα τε κόμαισι μείγνυται,

17

...

Eilt her zum Tanz, Olympier, her

1

...

Veilchengebundene Kränze empfängt, frühlingsgepfückter Lieder Klänge!

6

...

Was klar er (=Dionysos) zeigt, birgt sich mir nicht als Seher, so oft

13

Purpurnhüllter Horen Gemach sich eröffnet und herbei

14

Führt schönen Dufts der Frühling Gewächse dem Göttertrank gleich.

S.415 15

Dann, dann legt der heiligen Erde sich reizend Geflecht

S.417 16

Von Veilchen auf, und Rosen vermählen Haaren sich;

17

38) Schillers Brief an Körner vom 22. Januar 1789: NA. Bd.25. 1979. S.187. Z.28-32.

Warum soll es nicht passen, daß die Künstlererscheinung in der moralischen Welt mit dem Lenz verglichen wird? Es giebt kein wahreres Bild. Kunst ist nicht die Bestimmung des Menschen, sondern die Blüthe einer höheren Frucht. Zergliedere diese Vergleichung. Du wirst

sondern daß die Sangart überhaupt wird einen andern Charakter nehmen, und daß wir darum nicht aufkommen, weil wir, seit den Griechen, wieder anfangen, vaterländisch und natürlich, eigentlich originell zu singen.

31) Herakleitos „Fragment 119“: Die Fragmente der Vorsokratiker. Griechisch und Deutsch von Hermann Diels. Hrsg. v. Walther Kranz. 2 Bände. 1903. 6. Aufl. 1951. 7. Aufl. 1954 bis 16. Aufl. 1972, unveränderte Nachdrucke der 6. Aufl. Bd. I. S. 177.

Ἡ. Ἐφη ὡς ἦθος ἀνθρώπῳ δαίμων. ... Seine Eigenart ist dem Menschen sein Dämon (d. i. sein Geschick).

32) Schiller „Deutsche Größe“ ((6)19)

(8) RENAISSANCE

33) Augustinus (354-430) „Confessiones“ (397-400) / „De trinitate“ (400-419) / „De civitate Dei“ (413-426) etc. // Aquinas, Thomas (1225-74) „Summa theologia“

34) Nietzsche „Die Geburt der Tragödie aus dem Geiste der Musik“ (1872) / „Die Geburt der Tragödie, Oder Griechenthum und Pessimismus“ (1886) Kap. 11: Kritische Gesamtausgabe ((7)25). 3. Abt. Bd. 1. 1972. S. 71-74.

Die griechische Tragödie ist anders zu Grunde gegangen ... sie starb durch Selbstmord, ... „der grosse Pan ist todt“: so klang es jetzt wie ein schmerzlicher Klage-ton durch die hellenische Welt: „die Tragödie ist todt! Die Poesie selbst ist mit ihr verloren gegangen! ... (S. 71/S. 72) ... Diesen Todeskampf der Tragödie kämpfte Euripides; ... Der Mensch des alltäglichen Lebens drang durch ihn aus den Zuschauerräumen auf die Scene, der Spiegel, in dem früher nur die grossen und kühnen Züge zum Ausdruck kamen, zeigte jetzt jene peinliche Treue, die auch die misslungenen Linien der Natur gewissenhaft wiedergiebt. ... (S. 72/S. 73) ... Die bürgerliche Mittelmässigkeit, auf die Euripides alle seine politischen Hoffnungen aufbaute, kam jetzt zu Wort, nachdem bis dahin in der Tragödie der Halbgott, in der Komödie der betrunkenen Satyr oder der Halb-mensch den Sprachcharakter bestimmt hatten. ... (S. 73/S. 74) ... wenn jetzt überhaupt noch von „griechischer Heiterkeit“ die Rede sein darf, so ist es die Heiterkeit des Slaven, ... Dieser Schein der „griechischen Heiterkeit“ war es, der die tief-sinnigen und furchtbaren Naturen der vier ersten Jahrhunderte des Christenthums so empörte: ... Und ihrem Einfluss ist es zuzuschreiben, dass die durch Jahrhunderte fortlebende Anschauung des griechischen Alterthums mit fast unüberwindlicher Zähigkeit jene blassrothe Heiterkeitsfarbe festhielt — als ob es nie ein sechstes Jahrhundert mit seiner Geburt der Tragödie, seinen Mysterien, seinen Pythagoras und Heraklit gegeben hätte, ...

Vgl. „Die Geburt der Tragödie“ 12. Kap.: Bd. 1. S. 79.

Dionysus war bereits von der tragischen Bühne verscheucht und zwar durch eine aus Euripides redende dämonische Macht. Auch Euripides war in gewissem Sinne nur Maske: die Gottheit, die aus ihm redete, war nicht Dionysus, auch nicht Apollo, sondern ein ganz neugeborner Dämon, genannt Sokrates. Dies ist der neue Gegensatz: das Dionysische und das Sokratische, ...

Vgl. „Die Geburt der Tragödie“ 13. Kap.: Bd. 1. S. 87.

Wer nur einen Hauch von jener göttlichen Naivität und Sicherheit der sokratischen Lebensrichtung aus den platonischen Schriften gespürt hat, der fühlt auch, wie das ungeheure

für Germanistik. Ikubundo Verlag. Herbst 1984. Bd.73. S.83-91).

Vgl. Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein,,: „Heilige Nacht‘. (IV) „Ein sinnigies Haupt“ (Forschungsberichte der Universität Kôchi fürs Jahr 1985. Vol.35. Geisteswissenschaften. S.67-102 im vertikalen Druck).

(7)SITTLICHKEIT UND SCHÖNHEIT

25)Nietzsche „Also sprach Zarathustra“ 1.Teil. 1883. Kap.1. Von den drei Verwandlungen: Werke. Kritische Gesamtausgabe. Berlin. Gruyter. 6.Abt. Bd.1. 1968. S.26.

Welches ist der grosse Drache, den der Geist nicht mehr Herr und Gott heissen mag? „Du-sollst“ heisst der grosse Drache. ... Als sein Heiligstes liebte er einst das „Du-sollst“: ...
26)Platon „Politeia“ 505A/508E/509B: Werke((6)17). Bd.4. S.530-545.

ἡ τοῦ ἀγαθοῦ ἰδέα (505A: S.530/S.531) die Idee des Guten

τὴν τοῦ ἀγαθοῦ ἰδέαν (508E: S.542/S.543) die Idee des Guten

ἐπέκεινα τῆς οὐσίας (509B: S.544/S.545) über das Sein

27)„Ueber die ästhetische Erziehung ... “((6)17) 15.Brief: Bd.20. S.359.

Es ist weder Anmuth noch ist es Würde, was aus dem herrlichen Antlitz einer Juno Ludovisi zu uns spricht; es ist keines von beyden, weil es beydes zugleich ist.

Vgl. „Ueber Anmuth und Würde“: NA. Bd.20. S.251-308.

28)Horatius „De arte poetica“ 333-334: Sämtliche Werke. Lateinisch/Deutsch. Tusculum-Bücherei. München. Heimeran. 1957. Teil 2. S.250/S.251

aut prodesse volunt aut delectare poetae 333

aut simul et iucunda et idonea dicere vitae. 334 (S.250/S.251)

Sinnbelehrend will Dichtung wirken oder herzerfreuend, oder sie will beides geben: was lieblich eingeht und was dem Leben frommt.

Vgl. Hölderlin „Hyperion“ 1.Band. 1797. Vorrede: StA. Bd.3. S.5.

Ich verspräche gerne diesem Buche die Liebe der Deutschen. Aber ich fürchte, die einen werden es lesen, wie ein Compendium, und um das *fabula docet* sich zu sehr bekümmern, indeß die andern gar zu leicht es nehmen, und beede Theile verstehen es nicht. Wer blos an meiner Pflanze riecht, der kennt sie nicht, und wer sie pflückt, blos, um daran zu lernen, kennt sie auch nicht. Die Auflösung der Dissonanzen in einem gewissen Charakter ist weder für das bloße Nachdenken, noch für die leere Lust.

29)Schillers Brief an Körner vom 25. Mai 1792: Storz, Gerhard „Der Dichter Friedrich Schiller“ Stuttgart. Klett. 1959. 4.Aufl. 1968. S.213.

Das Musikalische eines Gedichtes schwebt mir weit öfter vor der Seele, wenn ich mich hinsetze, es zu machen, als der klare Begriff vom Inhalt, über den ich oft kaum mit mir einig bin ...

Vgl. Schillers Brief an Goethe vom 18. März 1796: Goethe-Artemis-Gedenkausgabe. Bd.20. 1950. S.164-165.

Bei mir ist die Empfindung anfangs ohne bestimmten und klaren Gegenstand; (S.164/S.165) dieser bildet sich erst später. Eine gewisse musikalische Gemütsstimmung geht vorher, und auf diese folgt bei mir erst die poetische Idee. ...

30)Hölderlins Brief an Böhlendorff vom 2. Dez. 1802. Br.240: StA. Bd.6. S.433.

Mein Lieber! ich denke, daß wir die Dichter bis auf unsere Zeit nicht commentiren werden,

18) Schillers Brief an Körner vom 9. Febr. 1789: NA. Bd.25. 1979. S.199. Z.16-21.

Der ganz veränderte Anfang gibt dem Gedichte, gegen seine vorige Gestalt, ein ganz unkenntliches Ansehen, doch sehr zu seinem Vortheil. Ich habe nun die Hauptidee des Ganzen die Verhüllung der Wahrheit und Sittlichkeit in die Schönheit zur herrschenden und im eigentlichen Verstande zur Einheit gemacht. ...

19) Schiller „Deutsche Größe“ (1797): NA. Bd.2. Teil 1. 1983. S.431-436.

Die Majestät des Deutschen ruhte nie auf dem Haupt s. Fürsten. Abgesondert von dem politischen hat der Deutsche sich einen eigenen Werth gegründet und wenn auch das Imperium unterginge, so bliebe die deutsche Würde unangefochten. ... Sie ist eine sittliche Größe, sie wohnt in der Kultur u: im Character der Nation, der von ihren politischen Schicksalen unabhängig ist. — Dieses Reich blüht in Deutschland, es ist in vollem Wachsen und mitten unter den gothischen Ruinen einer alten barbarischen Verfaßung bildet sich das Lebendige aus. (Der Deutsche wohnt in einem alten sturzdrohenden Hauß aber er selbst ist ein edler Bewohner, und indem das politische Reich wankt hat sich das Geistige immer fester und vollkommener gebildet.) (S.431/S.432) Dem, der den Geist bildet, beherrscht, muß zuletzt die Herrschaft werden, denn endlich an dem Ziel der Zeit, wenn anders die Welt einen Plan, wenn des Menschen Leben irgend nur Bedeutung hat, endlich muß die Sitte und die Vernunft siegen, die rohe Gewalt der Form erliegen — und das langsamste Volk wird alle die schnellen flüchtigen einholen. Die andern Völker waren dann die Blume, die abfällt Wenn die Blumen abgefallen bleibt die goldne Frucht übrig, bildet sich, schwillt die Frucht der Aernte zu. ...

20) „Das Ideal und das Leben“ 8.Str. V.77-V.80; NA. Bd.2. Teil 1. S.398: „Das Reich der Schatten“ 11.Str. V.107-V.110; NA. Bd.1. S.250.

Nur dem Ernst, den keine Mühe bleichet,
Rauscht der Wahrheit tief versteckter Born,
Nur des Meisels schwerem Schlag erweicht
Sich des Marmors sprödes Korn.

21) „Faust“ V.1796: Werke. HA((4)12). Bd.3. S.59.

Des Nordens Dau'rbarkeit.

22) Schiller „Ueber naive und sentimentalische Dichtung“: NA. Bd.20. S.453.

Noch, ich gestehe es, kenne ich kein Gedicht in dieser Gattung, weder aus älterer noch neuerer Litteratur, welches den Begriff, den es bearbeitet, rein und vollständig entweder bis zur Individualität herab oder bis zur Idee hinaufgeführt hätte. ... Dasjenige didaktische Gedicht, worinn der Gedanke selbst poetisch wäre, und es auch bliebe, ist noch zu erwarten. Was hier im allgemeinen von allen Lehrgedichten gesagt wird, gilt auch von den Hallerischen insbesondere. ...

23) Takahashi, Katsumi: Das Stadtbild im Anfang von „Brod und Wein“ (Forschungsberichte der Universität Kôchi fürs Jahr 1983. Vol.32. Geisteswissenschaften. S.21-70 im vertikalen Druck).

Vgl. Takahashi, Katsumi: VERINNERLICHUNG UND ERLEUCHTUNG — Über die erste Strophe von Hölderlins „Brod und Wein“: ‚Heilige Nacht‘. Erster Teil (Forschungsberichte der Universität Kôchi fürs Jahr 1985. Vol.34. Geisteswissenschaften. S.155-201 im vertikalen Druck).

24) Takahashi, Katsumi: LANDAUER — „ein sinniges Haupt“ in Hölderlins „Brod und Wein“ (DOITSU BUNGA KU: DIE DEUTSCHE LITERATUR. Hrsg. v. der Japanischen Gesellschaft

Genius als letztem erinnert an Ovids *Metamorphosen* I 148f: „et Virgo caele madentes, Ultima caelestum, terras Astraes reliquit“. ... (S.128/S.139) ... *von Kindern Gottes*, welches sich — nicht so sehr der Sache, als dem Ausdruck nach — nur gezwungen dieser Auslegung anpasst, ist eine im Neuen Testament häufig vorkommende Wendung. Ev. Joh. I 12f; Röm. VIII 14-17, 19, 21; Galat. IV 4-7; 1. Ep. Joh. III 1f, 10; u. s. w. Paulus beruft sich, zu Athen predigend, auf „etliche Poeten“ bei den Griechen, die gesagt haben: „Wir sind seines Geschlechts“ (Apostelg. XVII 28).

Vgl. Ovidius „*Metamorphoses*“ Tusculum-Bücherei. München. Heimeran. 1952. In deutsche Hexameter übertragen und mit dem Text hrsg. v. Rösch, Erich.

... et virgo caele madentis,		
ultima caelestum, terras Astraea reliquit.	150	S.14
... und, der Himmlischen letzte,		S.15
Jungfrau Astraea verläßt die mordbluttriefende Erde.	150	

Vgl. Schmidt: op. cit. ((1)1). S.129.

Der Patmosgesang bringt das gleiche Bild, um die Gottentfremdung nach dem Tode Christi deutlich zu machen (StA. Bd.2. S.169. V.157f.): „Wenn ... selber sein Angesicht / Der Höchste wendet / ... was ist diß?“ Dieses Sich-anwenden des göttlichen Angesichts als Ausdruck hereinbrechenden Unheils geht auf einen biblischen Topos zurück, der hier wiederholt aufgenommen wird. ... Vgl. 2. Chr. 30, 9: „Der Herr ... wird sein Angesicht nicht von euch wenden“; Ps. 104, 29: „Verbirgst du dein Angesicht, so erschrecken sie“; Ps. 69, 18: „Verbirg dein Angesicht nicht vor deinem Knechte“; Umgekehrt gilt das Schauen des göttlichen Antlitzes als Zeichen des Heiles; Ps. 27, 9: „Verbirg dein Antlitz nicht von mir“; Ps. 4, 7: „erhebe über uns das Licht deines Antlitzes“; Ps. 67, 2: „er lasse uns sein Antlitz leuchten“; Ps. 89, 16: „Sie werden im Licht deines Antlitzes wandeln“; Ps. 80, 4: „Laß leuchten dein Antlitz.“

16) „Faust“ V.11936-11937: Werke((4)12). HA = Hamburger Ausgabe. Bd.3. S.359.

Wer immer strebend sich bemüht, 11936

Den können wir erlösen. 11937

(6) URANIA APHRODITE

17) Schiller „Ueber die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen“ (1795) 6. Brief: NA. Bd.20. 1962. S.324.

So eifersüchtig ist der Staat auf den Alleinbesitz seiner Diener, daß er sich leichter dazu entschließen wird, (und wer kann ihm unrecht geben)? seinen Mann mit einer Venus Cytherea als mit einer Venus Urania zu theilen?

Vgl. Platon „Symposion“ 185B/185C: Werke auf der Textgrundlage der „*Œuvres complètes* (Collection des Universités de France)“ (Paris. Les Belles Lettres. 1955-74) Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. 1971-81. Bd.1-8. Bd.3. S.252/S.253 (Deutsche Übersetzung nach Schleiermacher).

Οὗτός ἐστιν ὁ τῆς Οὐρανίας θεοῦ Ἔρως καὶ Οὐράνιος, ... (185B/185C)

... Οἱ δ' ἕτεροι πάντες τῆς ἐτέρας, τῆς Πανδήμου. ...

Dieses ist der Eros der himmlischen Göttin und selbst himmlisch ... (185B/185C) ... jeder andere Eros aber gehört der anderen, der gemeinen. ...

Da wo die Nüchternheit dich verläßt, da ist die Gränze deiner Begeisterung. Der große Dichter ist niemals von sich selbst verlassen, er mag sich so weit über sich selbst erheben als er will. Man kann auch in die Höhe fallen, so wie in die Tiefe. Das letztere verhindert der elastische Geist, das erstere die Schwerkraft, die in nüchternem Besinnen liegt.

Vgl. Kant „Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels“(1755) 3. Teil. Anhang: Werke. AT((3)7). Bd.1. S.366. Z.4-20

Auf diese Weise wäre die Erde und vielleicht noch der Mars (damit der elende Trost uns ja nicht genommen werde, Gefährten des Unglücks zu haben) allein in der gefährlichen Mittelstraße, wo die Versuchung der sinnlichen Reizungen gegen die Oberherrschaft des Geistes ein starkes Vermögen zur Verleitung haben, dieser aber dennoch diejenige Fähigkeit nicht verleugnen kann, wodurch er im Stande ist, ihnen Widerstand zu leisten, wenn es seiner Trägheit nicht vielmehr gefiele, sich durch dieselbe hinreißen zu lassen, wo also der gefährliche Zwischenpunkt zwischen der Schwachheit und dem Vermögen ist, da eben dieselbe Vorzüge, die ihn über die niederen Classen erheben, ihn auf eine Höhe stellen, von welcher er wiederum unendlich tiefer unter diese herabsinken kann. In der That sind die beiden Planeten, die Erde und der Mars, die mittelsten Glieder des planetischen Systems, und es läßt sich von ihren Bewohnern vielleicht nicht mit Unwahrscheinlichkeit ein mittlerer Stand der physischen sowohl, als moralischen Beschaffenheit zwischen den zwei Endpunkten vermuthen;

12)Goethe „Faust“ V.12104-12111: Werke. Hamburger Ausgabe. München. Beck/dtv. 1981/1982. Bd.3. S.364.

Alles Vergängliche

Ist nur ein Gleichnis;

12105

Das Unzulängliche,

Hier wird's Ereignis;

Das Unbeschreibliche,

Hier ist's getan;

Das Ewig-Weibliche

Zieht uns hinan.

(5) VOLLENDUNG DER SCHÖPFUNG

13)Biblia Germanica 1545. Lutherbibel. Faksimile-Nachdruck. Stuttgart. Deutsche Bibelgesellschaft. 1967, 1983. Teil 2. Der Prophet Jesaia. 63. 16. S.XXXIII(Der Prophet Jesaia. LXIII).

Blstu doch vnser Vater / ... Du aber HERR bist vnser Vater vnd vnser Erlöser / Von alters her ist das dein Name. ... : Biblia Hebraica Stuttgartensia ((10)45), S.774. Z.4. אֲבִינוּ

14)Biblia Germanica 1545((5)13). Teil 2. An die Römer. 4. 17. S.CCCXXXVII.

Wie geschrieben stehet / Ich habe dich gesetzt zum Vater vieler Heiden / fur Gott / dem du glaubet hast / Der da lebendig machet die Todten / vnd ruffet dem das nicht ist / das es sey.

Vgl. Novum Testamentum graece et latine. Stuttgart. Württembergische Bibelanstalt. 1930. S.399: Epistola Pauli ad Romanos. 4. 17.

θεοῦ τοῦ ζωοποιοῦντος τοὺς νεκροὺς καὶ καλοῦντος τὰ μὴ ὄντα ὡς ὄντα •

Deum, ... , qui vivificat mortuos, et vocat ea quae non sunt, tamquam ea quae sunt.

15)Pezold: op. cit. ((1)1). S.128/S.139.

125-130. Das Aufsteigen der Götter von der ihrer unwürdig gewordenen Erde mit dem *stillen*

welche das alte heitere Bild des Todes aus den Grenzen der Kunst verdrungen hätte! Da jedoch ebendieselbe Religion uns nicht jene schreckliche Wahrheit zu unserer Verzweiflung offenbaren wollen; da auch sie uns versichert, daß der Tod der Frommen nicht anders als sanft und erquickend sein könnte: so sehe ich nicht, was unsere Künstler abhalten sollte, das scheußliche Gerippe wiederum aufzugeben und sich wiederum in den Besitz jenes bessern Bildes zu setzen. Die Schrift redet selbst von einem Engel des Todes; und welcher Künstler sollte nicht lieber einen Engel als ein Gerippe bilden wollen? Nur die mißverständene Religion kann uns von dem Schönen entfernen, und es ist ein Beweis für die wahre, für die richtig verstandene wahre Religion, wenn sie uns überall auf das Schöne zurückbringt.

Vgl. Winckelmann „Gedancken über die Nachahmung der Griechischen Wercke in der Malerey und Bildhauer-Kunst“ (1755) § 6/ § 79/ § 88: Sämtliche Werke. 12 Bände. Faksimile-Nachdruck der Ausgabe 1825 der 11 Bände. Osnabrück. Otto Zeller. 1965 (Bd.1-11. 1825 / Bd.12 1828). Bd.1. S.8/S.30-31/S.34.

§. 6. Der einzige Weg für uns, groß, ja, weiß es möglich ist, unnachahmlich zu werden, ist die Nachahmung der Alten, ... (S.8)

§. 79. Das allgemeine vorzügliche Keißeichen der griechischen Meisterstücke ist endlich eine edle Einfalt, und eine stille Größe, sowohl in der Stellung als im Ausdrucke. So wie die Tiefe des Meers allezeit ruhig bleibet, die Oberfläche mag (S.30/S.31) noch so wüthen, eben so zeigt der Ausdruck in den Figuren der Griechen bei allen Leidenschaften eine große und gesetzte Seele. Diese Seele schildert sich in dem Gesichte des Laokoons, und nicht in dem Gesichte allein, bei dem heftigsten Leiden.

§. 88. Die edle Einfalt und stille Größe der griechischen Statuen ist zugleich das wahre Keißeichen der griechischen Schriften aus den besten Zeiten, der Schriften aus Sokratis Schule: und diese Eigenschaften sind es, welche die vorzügliche Größe eines Raphaels machen, zu welcher er durch die Nachahmung der Alten gelangt ist. (S.34)

Vgl. „Laokoon“ Kap.1/Kap.26/Kap.29: Werke. Bd.4(Teil 4). S.293-294/S.409/S.421.

Das allgemeine vorzügliche Kennzeichen der griechischen Meisterstücke in der Malerei und Bildhauerkunst setzt Herr Winckelmann in eine edele Einfalt und stille Größe, sowohl in der Stellung als im Ausdrucke. „So wie die Tiefe des Meeres“, sagt er, „allezeit ruhig bleibt, ...“ ... (S.293/S.294) ... Die Bemerkung, welche hier zum Grunde liegt, daß der Schmerz sich in dem Gesichte des Laokoon mit derjenigen Wut nicht zeige, welche man bei der Heftigkeit desselben vermuten sollte, ist vollkommen richtig. ... (S.294//S.409) XXVI. Des Herrn Winckelmanns „Geschichte der Kunst des Altertums“ (1764) ist erschienen. Ich wage keinen Schritt weiter, ohne dieses Werk gelesen zu haben. ... und wo so ein Mann die Fackel der Geschichte vorträgt, kann die Spekulation kühnlich nachtreten. ... (S.409/S.421) XXIX. Bei der unermeßlichen Belesenheit, bei den ausgebreitetsten feinsten Kenntnissen der Kunst, mit welchen sich Herr Winckelmann an sein Werk machte, hat er mit der edeln Zuversicht der alten Artisten gearbeitet, die allen ihren Fleiß auf die Hauptsache verwandten, und was Nebendinge waren, entweder mit einer gleichsam vorsätzlichen Nachlässigkeit behandelten, oder gänzlich der ersten der besten fremden Hand überließen. ... (S.421)

11)Hölderlin „Reflexion“: StA. Bd.4. S.233

Vgl. Grosse „Die Künstler ...“ ((1)1) S.93-94.

250ff. Schiller a.a.O. „Das Gleichnis: der Schatten in des Mondes Angesichte ... Nach dieser Erklärung wird Schiller nicht daran gedacht haben, daß von dem Zwillingpaar Kastor sterblich, Polydeukes unsterblich ist (Pindar Nem. X 80f.) — nicht umgekehrt, wie es Putsche an- (S.93/S.94) merkt —, sondern für die Zwillinge Leben und Tod wählte er in poetischer Weise lebendiger personifizierend jenes allbekannte Paar und gab dem einen das Attribut des Genius des Todes.

Vgl. Novalis „Hymnen an die Nacht“ („Athenaeum“ Bd.3. 2.Stück. 1800) 5.Hymne: Schriften. 4.Bde. Leipzig. Bibliographisches Institut. 1929. Bd.1. S.60/S.62; Schriften in 4 Bdn. u. 1 Begleitbd. Bd.1. 1960 (3.Aufl. 1977) / Bd.2. 1960 (3.Aufl. 1983) / Bd.3. 1960 (3.Aufl. 1981) / Bd.4. 1975. Bd.1. S.143/S.147.

Ein Gedanke nur war es, ein entsetzliches Traumbild, ... Es war der Tod, der dieses Lustgelag / Mit Angst und Schmerz und Tränen unterbrach. ... Mit kühnem Geist und hoher Sinnenglut / Verschönte sich der Mensch die grause Larve, / Ein sanfter Jüngling löscht das Licht und ruht — / Sanft wird das Ende, wie ein Wehn der Harfe. (S.60/S.62: S.143/S.147) Von ferner Küste, unter Hellas heiterm Himmel geboren, kam ein Sänger nach Palästina und ergab sein ganzes Herz dem Wunderkinde: „Der Jüngling bist du, der seit langer Zeit / Auf unsern Gräbern steht in tiefem Sinnen; Ein tröstlich Zeichen in der Dunkelheit — / Der höhern Menschheit freudiges Beginnen. / Was uns gesenkt in tiefe Traurigkeit, / Zieht uns mit süßer Sehnsucht nun von hinnen. / Im Tode ward das ewge Leben kund, / Du bist der Tod und machst uns erst gesund.“ ...

Vgl. „Die Götter Griechenlandes“ V.105((4)8): „gräßliches Gerippe“ // V.108-109((4)8): „still und traurig senkt' ein Genius / seine Fackel.“ // V.114((4)8): „heiliger Barbar,“

Vgl. Lessing „Laokoon“(1766) Kap.11. Anmerkung 1): Werke. Bongs Goldene Klassiker Bibliothek. 25 Teile. 1925/1929/1935. Reprografischer Nachdruck. Hildesheim. Olms. 25 Bände. 1970. Bd.4(Teil 4). S.346-347.

Die alten Künstler haben auch wirklich den Tod und den Schlaf mit der Ähnlichkeit unter sich vorgestellt, die wir an Zwillingen so natürlich erwarten. ... Die neuen Artisten sind von dieser Ähnlichkeit, welche Schlaf und Tod bei den Alten miteinander haben, gänzlich abgegangen, und der Gebrauch ist allgemein geworden, den Tod als ein Skelett, höchstens als ein mit Haut bekleidetes Skelett vorzustellen. Von allen Dingen hätte Caylus dem Künstler also hier raten müssen, ob er in Vorstellung des Todes dem alten oder dem neuen Gebrauche folgen solle. ... (S.346/S.347) ... ein liegendes Skelett ... , das mit dem einen Arme auf einem Aschenkrüge ruhet ... Den Tod überhaupt kann es wenigstens nicht vorstellen sollen, weil ihn die Alten anders vorstellen. Selbst ihre Dichter haben ihn unter diesem widerlichen Bilde nie gedacht.

Vgl. Lessing „Wie die Alten den Tod gebildet“(1769): Werke. Bd.15(17. Teil). S.316/S.317/S.356.

Diese Figur, sagt Bellori, sei Amor, welcher die Fackel, das ist, die Affekten, auf der Brust des verstorbenen Menschen auslösche. Und ich sage, diese Figur ist der Tod! (S.316/S.317) ... Vielmehr spricht alles, was um und an diesem geflügelten Jüngling ist, für das Bild des Todes. ... (S.317//S.356) ... Von dieser Seite wäre es also vermutlich unsere Religion,

Fliehet aus dem engen dumpfen Leben

29

In des Ideales Reich!

„Das Ideal und das Leben“

Wollt ihr hoch auf ihren Flügeln schweben,

„Das Reich der Schatten“

Werft die Angst des Irdischen von euch,

Fliehet aus dem engen dumpfen Leben

In der Schönheit Schattenreich!

40

Vgl. „Das Ideal und das Leben“ Str.15. V.141-146; NA. Bd.2. Teil 1. S.400: „Das Reich der Schatten“ Str.18. V.171-176.; NA. Bd.1. S.251.

Bis der Gott, des Irdischen entkleidet,

Flammend sich vom Menschen scheidet,

Und des Aethers leichte Lüfte trinkt.

Froh des neuen ungewohnten Schwebens

Fließt er aufwärts und des Erdenlebens

145

Schweres Traumbild sinkt und sinkt und sinkt.

„Das Ideal und das Leben“

Biß der Gott, des Irdischen entkleidet,

„Das Reich der Schatten“

Flammend sich vom Menschen scheidet

Und des Aethers leichte Lüfte trinkt.

Froh des neuen ungewohnten Schwebens

Fließt er aufwärts, und des Erdenlebens

175

Schweres Traumbild sinkt und sinkt und sinkt.

10) Schillers Brief an Körner vom 30. März 1789: NA. Bd.25. 1979. S.238. Z.6-33.

Das Gleichniß: Der Schatten in des Mondes Angesichte usf. hat in meinen Augen einen ungemeynen Werth. Das Menschliche Leben, sage ich in den vorhergehenden Versen, erscheint dem Menschen als ein Bogen d.i. als ein unvollkommener Theil eines Kreises, den er durch die Nacht des Grabes fortsetzt um den Zirkel ganz zu machen (von Schönheit oder Kunstgefühl sich regieren lassen ist ja nichts anders als den Hang haben, alles ganz zu machen, alles zur Vollendung zu bringen) Nun ist aber der wachsende Mond ein solcher Bogen, und der übrige Theil, der noch fehlt um den Zirkel völlig zu machen ist unbeleuchtet. Ich stelle also zwey Jünglinge nebeneinander, davon der eine beleuchtet ist, der andere nicht, (mit umgestürztem Lichte) jenen vergleiche ich mit der beleuchteten Mondes Hälfte, diesen mit der schwarzen, oder was eben soviel sagt, die Alten die den Tod bildeten, stellten ihn als einen Jüngling vor, der eben so schön ist als sein Bruder, das Leben, aber sie gaben ihm eine umgestürzte Fackel, um anzudeuten, daß man ihn nicht sehe — eben so wie an den ganzen Ring des Mondes glauben, ob er uns gleich nur als ein Bogen oder als ein Horn erscheint. Ich habe in dieser Stelle ein Gleichniß Obians in Gedanken gehabt und zu veredeln gesucht. Obian sagt von einem der dem Tod nahe war „der Tod stand hinter ihm, wie die schwarze Hälfte des Mondes hinter seinem silbernen Horn“. Diese ganze Strophe muß man überhaupt mit einer lebhaften Gegenwart des Hauptgedankens lesen „daß der Mensch, in dem einmal das Gefühl für Schönheit, für Wohlklang und Ebenmaaß rege und herrschend geworden ist, nicht ruhen kann biß er alles um sich in Einheit auflößt, alle Bruchstücke ganz macht, alles mangelhafte vollendet, oder was eben soviel sagt, biß er alle Formen um sich her der vollkommensten nähert.

hinausführen wollen, trüglich und grundlos sind; sondern er lehrt uns zugleich dieses Besondere: daß die menschliche Vernunft dabei einen natürlichen Hang habe, diese Grenze zu überschreiten, daß transscendentale Ideen ihr eben so natürlich seien, als dem Verstande die Kategorien, obgleich mit dem Unterschiede, daß, so wie die letztern zur Wahrheit, d.i. der Übereinstimmung unserer Begriffe mit dem Objecte, führen, (Bd.3. S.426/S.427) die erstern einen bloßen, aber unwiderstehlichen Schein bewirken, dessen Täuschung man kaum durch die schärfste Kritik abhalten kann. Alles, was in der Natur unserer Kräfte gegründet ist, muß zweckmäßig und mit dem richtigen Gebrauche derselben einstimmig sein, wenn (2.Aufl. S.670 /S.671) wir nur einen gewissen Mißverstand verhüten und die eigentliche Richtung derselben ausfindig machen können. Also werden die transscendentalen Ideen allem Vermuthen nach ihren guten und folglich immanenten Gebrauch haben, obgleich, wenn ihre Bedeutung verkannt und sie für Begriffe von wirklichen Dingen genommen werden, sie transscendent in der Anwendung und eben darum trüglich sein können. Denn nicht die Idee an sich selbst, sondern bloß ihr Gebrauch kann entweder in Ansehung der gesammten möglichen Erfahrung überfliegend (transscendent), oder einheimisch (immanent) sein, nachdem man sie entweder geradezu auf einen ihr vermeintlich entsprechenden Gegenstand, oder nur auf den Verstandesgebrauch überhaupt in Ansehung der Gegenstände, mit welchen er zu thun hat, richtet; und alle Fehler der Subreption sind jederzeit einem Mangel der Urtheilskraft, niemals aber dem Verstande oder der Vernunft zuzuschreiben.

(4)CHRISTUS

8) „Die Götter Griechenlandes“ 1.Fas. Str.14-15: NA. Bd.1. S.193.

Damals trat kein gräßliches Gerippe 105

vor das Bett des Sterblichen. Ein Kuß

nahm das letzte Leben von der Lippe,

still und traurig senkt' ein Genius

seine Fackel. Schöne lichte Bilder

scherzten auch um die Nothwendigkeit, 110

und das ernste Schicksal blickte milder

durch den Schleyer sanfter Menschlichkeit. 14.Str.

Nach der Geister schrecklichen Gesetzen 15.Str.

richtete kein heiliger Barbar,

dessen Augen Thränen nie benetzen, 115

zarte Wesen, die ein Weib gebahr.

Selbst des Orkus strenge Richterwaage

hielt der Enkel einer Sterblichen,

und des Thrakers seelenvolle Klage

rührte die Erinnyen. 120

9)Schiller „Das Ideal und das Leben“ („Gedichte“ 1.Teil. 2.Aufl. 1804) Str.3. V.27-30; NA. Bd.2. Teil 1. S.397; „Das Reich der Schatten“ („Die Horen“ 1795) Str.4. V.37-40; NA. Bd.1. S.248; „Das Reich der Formen“ („Gedichte“ 1.Teil. 1.Aufl. 1800); NA. Bd.2. Teil 1. S.118.

Wollt ihr hoch auf ihren Flügeln schweben,

Werft die Angst des Irdischen von euch,

ihre höchste Wirkung gewonnen.

Vgl. Wendt, Kurt „Hölderlin und Schiller. Eine vergleichende Stilbetrachtung“ (Berlin 1929) Nachdruck mit Genehmigung des Matthiesen Verlags, Lübeck. Nendeln/Liechtenstein. Kraus. 1967. S.16-57: Stilanalyse von Hölderlins „Hymne an die Muse“ und Schillers Gedicht „Die Künstler“ S.46.

Als der Mensch über den Abgrund des Todes hinweg „den Bogen weiter durch der Zukunft Nacht, („Die Künstler“ V.245) führte, „da zeigte sich, mit umgestürztem Lichte, / An Kastor angelehnt, ein blühend Polluxbild ...“ („Die Künstler“ V.250f.) oder: „So süß, so selig ... verklärte, („Die Künstler“ V.439-442). Die Gestaltung des Satzes in den „Künstlern“, verglichen mit derjenigen in der „Hymne an die Muse“, zeigt, wie verschiedenartige Möglichkeiten dieses so benannte syntaktische Gebilde offen läßt. ... (Germanische Studien. Heft 70: Wendt ... S.46)

Vgl. Schmidt, Jochen: Hölderlins Elegie „Brod und Wein“. Die Entwicklung des hymnischen Stils in der elegischen Dichtung. Berlin. Gruyter. 1968.

2) Hölderlin „Wechsel der Töne“: StA. Bd.4. S.238.

(2) TRIADE

3) Vgl. * / „Die Künstler“ (Ausgabe letzter Hand): NA = Nationalausgabe. Bd.2. Teil 1. 1983. S.383-396.

(3) GRIECHENTUM

4) Vgl. „Hellas und Hesperien bei Hölderlin, ((1)1).

5) Schiller „Die Götter Griechenlandes“ (2.Fas. 1793/„Gedichte“ 1.Teil. 1800): NA. Bd.2. Teil 1. S.363-367 (16 Strophen). 16.Str. V.127f. S.367.

Was unsterblich im Gesang soll leben 127

Muß im Leben untergehn. 128

6) „Die Götter Griechenlandes“ 1.Fas. 1788. März „Der Teutsche Merkur“ S.250-260. 19.Str. V.145-8. S.257; NA. Bd.1. S.190-5. V.145ff. S.194: 2.Fas. 12.Str. V.89-92; NA. Bd.2. Teil 1. S.366.

Schöne Welt, wo bist du? — Kehre wieder, 145

holdes Blütenalter der Natur!

Ach! nur in dem Feenland der Lieder

lebt noch deine goldne Spur.

Schöne Welt, wo bist du? Kehre wieder	<u>1.Fas.</u>	<u>19.Str.</u>
	2.Fas.	12.Str.

Holdes Blütenalter der Natur! 90

Ach nur in dem Feenland der Lieder

Lebt noch deine fabelhafte Spur.

7) Kant „Kritik der reinen Vernunft“ 1.Aufl. 1781. S.642f.; 2.Aufl. 1787. S.670f.: Werke. Akademie-Textausgabe(=AT). 9 Bde. Fotomech. Abdruck des Textes der von der Preuß. Akademie der Wissenschaften 1902 begonnenen Ausgabe von Kants gesammelten Schriften. Berlin. Gruyter. 1968. (Anmerkungen. 2 Bde. 1977). Bd.3. S.426-427.

Anhang zur transscendentalen Dialektik. Von dem regulativen Gebrauch der Ideen der reinen Vernunft. Der Ausgang aller dialektischen Versuche der reinen Vernunft bestätigt nicht allein, was wir schon in der transscendentalen Analytik bewiesen, nämlich daß alle unsere Schlüsse, die uns über das Feld möglicher Erfahrung

Und nicht eitel erdacht tönent dem Alten das Lob.

9.

Ja! sie sagen mit Recht, er söhne den Tag mit der Nacht aus	
Führe des Himmels Gestirn ewig hinunter, hinauf,	
Allzeit froh, wie das Laub der immergrünenden Fichte,	
Das er liebt und der Kranz, den er von Epheu gewählet,	FrA $\frac{S.251}{S.252}$ 145
Weil er bleibet und selbst die Spur der entflohenen Götter	
Götterlosen hinab unter das Finstere bringt.	StA $\frac{S.94}{S.95}$
Was der Alten Gesang von Kindern Gottes geweissagt,	
Siehe, wir sind es, wir; Frucht von Hesperien ist!	150
Wunderbar und genau ist als an Menschen erfüllet,	
Glaube, wer es geprüft! aber so vieles geschieht	
Keines wirket, denn wir sind herzlos, Schatten, bis unser	
Vater Aether erkannt jeden und allen gehört.	
Aber indessen kommt als Fackelschwinger des Höchsten	155
Sohn, der Syrier, unter die Schatten herab.	
Seelige Weise sehns; ein Lächeln aus der gefangnen	
Seele leuchtet, dem Licht thauet ihr Auge noch auf.	
Sanfter träumet und schläft in Armen der Erde der Titan,	
Selbst der neidische, selbst Cerberus trinket und schläft.	160

(Text nach der Frankfurter Ausgabe =FrA)

(StA= Stuttgarter Ausgabe)

(HgA= Hellingrath-Ausgabe)

(1)VORWORT

1)Takahashi, Katsumi: Hellas und Hesperien bei Hölderlin — „Seeliges Griechenland“ (I) Schillers Aufbruch (1)-(7) / (II) Das klassische Griechentum und das abendländische Christentum (1)-(5) // (II) (6)-(7) / (III) „Gott der Mythe“ (1)-(9) // (III) (10) „Die tiefste Innigkeit“ (Forschungsberichte der Universität Kôchi fürs Jahr 1984 // 1985 // 1986. Vol.33 // Vol.34 // Vol.35. Geisteswissenschaften. S.13-72 // S.1-72 // S.1-66 im vertikalen Druck).

Vgl. Haym, Rudolf „Die romantische Schule. Ein Beitrag zur Geschichte des deutschen Geistes“ (Berlin. Rudolf Gaertner. 1870) III.Buch. I.Kap. ‚Ein Seitentrieb der romantischen Poesie‘ (S.289). IV.Aufl. Berlin. Weidmann. 1920. S.341.

Vgl. Grosse, Emil „Die Künstler von Schiller 1789“ Berlin. Weidmannsche Buchhandlung. 1890.

Vgl. Hölderlin „Brod und Wein“ Erstveröffentlichung. 1894(nach Handschrift 2)/1896(nach Handschrift 3): Stuttgarter Ausgabe. Bd.8. Register. S.286.

Vgl. Pezold, Emil „Hölderlins Brod und Wein“ Sambor 1896-97.

Vgl. Dilthey, Wilhelm „Das Erlebnis und die Dichtung“ (1905) 8.Aufl. Leipzig. Teubner. 1922. S.396: Hyperion ist nicht ‚ein Seitentrieb der romantischen Poesie‘, wie Haym ihn auffaßte; ... eine neue Form des philosophischen Romans; sie hat dann in dem Zarathustra Nietzsches

Und bekränzen sich denn nimmer die Schiffe Korinths?	
Warum schweigen auch sie, die alten heiligen Theater?	
Warum freuet sich denn nicht der geweihte Tanz?	
Warum zeichnet, wie sonst, die Stirne des Mannes ein Gott nicht,	105
Drückt den Stempel, wie sonst, nicht dem Getroffenen auf?	
Oder er kam auch selbst und nahm des Menschen Gestalt an	
Und vollendet' und schloß tröstend das himmlische Fest.	FrA $\frac{S.250}{S.251}$
7.	
Aber Freund! wir kommen zu spät. Zwar leben die Götter	
Aber über dem Haupt droben in anderer Welt.	110
Endlos wirken sie da und scheinens wenig zu achten,	
Ob wir leben, so sehr schonen die Himmlischen uns.	
Denn nicht immer vermag ein schwaches Gefäß sie zu fassen,	HgA $\frac{S.123}{S.124}$
Nur zu Zeiten erträgt göttliche Fülle der Mensch.	
Traum von ihnen ist drauf das Leben. Aber das Irrsaal	115
Hilft, wie Schlummer und stark machet die Noth und die Nacht,	
Biß daß Helden genug in der ehernen Wiege gewachsen,	
Herzen an Kraft, wie sonst, ähnlich den Himmlischen sind.	StA $\frac{S.93}{S.94}$
Donnernd kommen sie drauf. Indessen dünket mir öfters	
Besser zu schlafen, wie so ohne Genossen zu seyn,	120
So zu harren und was zu thun indeß und zu sagen,	
Weiß ich nicht und wozu Dichter in dürftiger Zeit?	
Aber sie sind, sagst du, wie des Weingotts heilige Priester,	
Welche von Lande zu Land zogen in heiliger Nacht.	
8.	
Nemlich, als vor einiger Zeit, uns dünket sie lange,	125
Aufwärts stiegen sie all, welche das Leben beglückt,	
Als der Vater gewandt sein Angesicht von den Menschen,	
Und das Trauern mit Recht über der Erde begann,	
Als erschienen zu lezt ein stiller Genius, himmlisch	
Tröstend, welcher des Tags Ende verkündet' und schwand,	130
Ließ zum Zeichen, daß einst er da gewesen und wieder	
Käme, der himmlische Chor einige Gaaben zurück,	
Derer menschlich, wie sonst, wir uns zu freuen vermöchten,	
Denn zur Freude mit Geist, wurde das Größre zu groß	
Unter den Menschen und noch, noch fehlen die Starken zu höchsten	135
Freuden, aber es lebt stille noch einiger Dank.	
Brod ist der Erde Frucht, doch ists vom Lichte geseegnet,	
Und vom donnernden Gott kommet die Freude des Weins.	
Darum denken wir auch dabei der Himmlischen, die sonst	HgA $\frac{S.124}{S.125}$
Da gewesen und die kehren in richtiger Zeit,	140
Darum singen sie auch mit Ernst die Sänger den Weingott	

Delphi schlummert und wo tönet das große Geschik?
 Wo ist das schnelle? wo brichts, allgegenwärtigen Glücks voll
 Donnernd aus heiterer Luft über die Augen herein?
 Vater Aether! so riefs und flog von Zunge zu Zunge 65
 Tausendfach, es ertrug keiner das Leben allein;
 Ausgetheilet erfreut solch Gut und getauschet, mit Fremden,
 Wirds ein Jubel, es wächst schlafend des Wortes Gewalt. HgA S.121
 Vater! heiter! und hallt, so weit es gehet, das uralt S.122
 Zeichen, von Eltern geerbt, treffend und schaffend hinab. 70
 Denn so kehren die Himmlischen ein, tiefschütternd gelangt so
 Aus den Schatten herab unter die Menschen ihr Tag. FrA S.249
 S.250

5.

Unempfunden kommen sie erst, es streben entgegen
 Ihnen die Kinder, zu hell kommet, zu blendend das Glück,
 Und es scheut sie der Mensch, kaum weiß zu sagen ein Halbgott 75
 Wer mit Nahmen sie sind, die mit den Gaaben ihm nahn.
 Aber der Muth von ihnen ist groß, es füllen das Herz ihm
 Ihre Freuden und kaum weiß er zu brauchen das Gut,
 Schafft, verschwendet und fast ward ihm Unheiliges heilig,
 Das er mit seegnender Hand thörig und gütig berührt. 80
 Möglichst dulden die Himmlischen diß; dann aber in Wahrheit
 Kommen sie selbst und gewohnt werden die Menschen des Glücks
 Und des Tags und zu schau'n die Offenbaren, das Antliz
 Derer, welche schon längst Eines und Alles genannt
 Tief die verschwiegene Brust mit freier Genüge gefüllet, 85
 Und zuerst und allein alles Verlangen beglückt;
 So ist der Mensch; wenn da ist das Gut, und es sorget mit Gaaben
 Selber ein Gott für ihn, kennet und sieht er es nicht. StA S.92
 Tragen muß er, zuvor; nun aber nennt er sein Liebstes, S.93
 Nun, nun müssen dafür Worte, wie Blumen, entstehn. HgA S.122 90
 S.123

6.

Und nun denkt er zu ehren in Ernst die seeligen Götter,
 Wirklich und wahrhaft muß alles verkünden ihr Lob.
 Nichts darf schauen das Licht, was nicht den Hohen gefället,
 Vor den Aether gebührt müßigversuchendes nicht.
 Drum in der Gegenwart der Himmlischen würdig zu stehen, 95
 Richten in herrlichen Ordnungen Völker sich auf
 Untereinander und baun die schönen Tempel und Städte
 Vest und edel, sie gehn über Gestaden empor —
 Aber wo sind sie? wo blüh'n die Bekannten, die Kronen des Festes?
 Thebe welkt und Athen; rauschen die Waffen nicht mehr 100
 In Olympia, nicht die goldnen Wagen des Kampfspiels,

Selbst kein Weiser versteht, was sie bereitet, denn so
 Will es der oberste Gott, der sehr dich liebet, und darum
 Ist noch lieber, wie sie, dir der besonnene Tag.
 Aber zuweilen liebt auch klares Auge den Schatten 25
 Und versucht zu Lust, eh' es die Noth ist, den Schlaf,
 Oder es blickt auch gern ein treuer Mann in die Nacht hin, StA $\frac{S.90}{S.91}$
 Ja, es ziemet sich ihr Kränze zu weihn und Gesang,
 Weil den Irrenden sie geheiligt ist und den Todten,
 Selber aber besteht, ewig, in freiestem Geist. 30
 Aber sie muß uns auch, daß in der zaudernden Weile,
 Daß im Finstern für uns einiges Haltbare sei,
 Uns die Vergessenheit und das Heiligtrunkene gönnen,
 Gönnen das strömende Wort, das, wie die Liebenden, sei, FrA $\frac{S.248}{S.249}$
 Schlummerlos und vollern Pokal und kühneres Leben, 35
 Heilig Gedächtniß auch, wachend zu bleiben bei Nacht.

3.

Auch verbergen umsonst das Herz im Busen, umsonst nur
 Halten den Muth noch wir, Meister und Knaben, denn wer
 Möcht' es hindern und wer möcht' uns die Freude verbieten?
 Göttliches Feuer auch treibet, bei Tag und bei Nacht, 40
 Aufzubrechen. So komm! daß wir das Offene schauen,
 Daß ein Eigenes wir suchen, so weit es auch ist.
 Fest bleibt Eins; es sei um Mittag oder es gehe
 Bis in die Mitternacht, immer besteht ein Maas,
 Allen gemein, doch jeglichem auch ist eignes beschieden, HgA $\frac{S.120}{S.121}$ 45
 Dahin gehet und kommt jeder, wohin er es kann.
 Drum! und spotten des Spotts mag gern frohlokkender Wahnsinn
 Wenn er in heiliger Nacht plötzlich die Sänger ergreift.
 Drum an den Isthmos komm! dorthin, wo das offene Meer rauscht
 Am Parnaß und der Schnee delphische Felsen umglänzt, 50
 Dort ins Land des Olymps, dort auf die Höhe Cithärons,
 Unter die Fichten dort, unter die Trauben, von wo
 Thebe drunten und Ismenos rauscht, im Lande des Kadmos,
 Dorther kommt und zurück deutet der kommende Gott.

4.

Seeliges Griechenland! du Haus der Himmlischen alle, 55
 Also ist wahr, was einst wir in der Jugend gehört?
 Festlicher Saal! der Boden ist Meer! und Tische die Berge
 Wahrlich zu einzigem Brauche vor Alters gebaut!
 Aber die Thronen, wo? die Tempel, und wo die Gefäße,
 Wo mit Nectar gefüllt, Göttern zu Lust der Gesang? 60
 Wo, wo leuchten sie denn, die fernhintreffenden Sprüche?

der weisse Schimmer lieblich bricht, 475
wie sieben Regenbogenstrahlen
zerrinnen in das weiße Licht:
so spielt in tausendfacher Klarheit
bezaubernd um den trunknen Blick,
so fließt in Einen Bund der Wahrheit 480
in Einen Stroh des Lichts zurück!

*Hölderlin „Brod und Wein“(1800-01): Sämtliche Werke. Bd.4. Besorgt durch N. Hellingrath. Gedichte 1800-1806. 2.Aufl. Berlin. Propyläen-Verlag. 1923. S.119-125; Sämtliche Werke. Stuttgarter Ausgabe. Kohlhammer. 1946-77(Register 1985). Bd.2. 1951. S.90-95; Sämtliche Werke. Frankfurter Ausgabe. Roter Stern. Bd.6. 1976. S.248-252(Unemendierter Text V).

BROD UND WEIN. AN HEINZE

I

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,
Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.
Satt gehn heim ... (Hellingrath-Ausgabe =HgA. S.119)

1.

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,
Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.
Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen,
Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt
Wohlfrieden zu Haus; leer steht von Trauben und Blumen, 5
Und von Werken der Hand ruht der geschäftige Markt.
Aber das Saitenspiel tönt fern aus Gärten; vielleicht, daß
Dort ein Liebendes spielt oder ein einsamer Mann
Ferner Freunde gedenkt und der Jugendzeit; und die Brunnen,
Immerquillend und frisch rauschen an duftendem Beet. 10
Still in dämmriger Luft ertönen geläutete Glocken,
Und der Stunden gedenk ruft ein Wächter die Zahl.
Jetzt auch kommet ein Wehn und regt die Gipfel des Hains auf,
Sieh! und das Schattenbild unserer Erde, der Mond
Kommet geheim nun auch; die Schwärmerische, die Nacht kommt, 15
Voll mit Sternen und wohl wenig bekümmert um uns,
Glänzt die Erstaunende dort, die Fremdlingin unter den Menschen
Über Gebirgshöhn traurig und prächtig herauf.

2.

HgA $\frac{S.119}{S.120}$

Wunderbar ist die Gunst der Hoherhabnen und niemand
Weiß von wannen und was einem geschiehet von ihr. 20
So bewegt sie die Welt und die hoffende Seele der Menschen,

umleuchtet von der Feuerkrone
 steht dann vor ihrem mündgen Sohne 435 TM $\frac{300}{301}$
 entschleyert — als Urania;
 so schneller nur von ihm erhaschet,
 je schöner er von ihr geflohn!
 So süß so selig überraschet
 stand einst Ulyssens edler Sohn, 440
 da seiner Jugend himmlischer Geführte
 zu Jovis Tochter sich verklärte.

Der Menschheit Würde ist in eure Hand gegeben, (32)
 bewahret sie!
 Sie sinkt mit euch! Mit euch wird die Gesunkene sich heben! 445
 Der Dichtung heilige Magie
 dient einem weisen Weltenplane,
 still lenke sie zum Ozeane
 der großen Harmonie!

Von ihrer Zeit verstoßen, flüchte (33) 450
 die ernste Wahrheit zum Gedichte,
 und finde Schutz in der Camönen Chor.
 In ihres Glanzes höchster Fülle,
 furchtbarer in des Reitzes Hülle,
 erstehe sie in dem Gesange
 und räche sich mit Siegesklange
 an des Verfolgers feigem Ohr.
 Der freysten Mutter freye Söhne TM $\frac{301}{302}$
 schwingt euch mit festem Angesicht
 zum Strahlensitz der höchsten Schöne, 460
 um andre Kronen buhlet nicht.

Die Schwester, die euch hier verschwunden,
 hohlt ihr im Schoos der Mutter ein;
 was schöne Seelen schön empfunden
 muß treflich und vollkommen seyn. 465

Erhebet euch mit kühnem Flügel
 hoch über euren Zeitenlauf;
 fern dämmre schon in euerm Spiegel
 das kommende Jahrhundert auf.
 Auf tausendfach verschlungnen Wegen 470
 der reichen Mannigfaltigkeit
 kommt dann umarmend euch entgegen
 am Thron der hohen Einigkeit.

Wie sich in sieben milden Strahlen

begann die Seelenbildende Natur,
mit euch, dem freud'gen Aerntekranze, 395
schließt die vollendende Natur.

Die von dem Thon, dem Stein bescheiden aufgestiegen, (28)
die schöpferische Kunst, umschließt mit stillen Siegen
des Geistes unermeßnes Reich;
was in des Wissens Land Entdecker nur ersiegen, 400
entdecken sie, ersiegen sie für euch.
Der Schätze, die der Denker aufgehäufet,
wird er in euren Armen erst sich freun,
wenn seine Wissenschaft, der Schönheit zugereifet,
zum Kunstwerk wird geadelt seyn — 405
wenn er auf einen Hügel mit euch steigt,
und seinem Auge sich, in mildem Abendschein,
das mahlerische Thal — auf einmal zeigt.

Je reicher ihr den schnellen Blick vergnüget, (29)
je höh're schön're Ordnungen der Geist 410
in einem Zauberbund durchflieget, TM $\frac{299}{300}$
in einem schwelgenden Genuß umkreiß't;
je weiter sich Gedanken und Gefühle
dem üppigeren Harmonienspiele
dem reichern Strom der Schönheit aufgethan — 415
je schön're Glieder aus dem Weltenplan,
die jetzt verstümmelt seine Schöpfung schänden,
sieht er die hohen Formen dann vollenden,
je schönre Räthsel treten aus der Nacht,
je reicher wird die Welt, die er umschließet, 420
je breiter strömt das Meer mit dem er fließet,
je schwächer wird des Schicksals blinde Macht,
je höher streben seine Triebe,
je kleiner wird er selbst, je größer seine Liebe.

So führt ihn, in verborgnem Lauf, (30) 425
durch immer reinre Formen, reinre Töne,
durch immer höh're Höhn und immer schön're Schöne
der Dichtung Blumenleiter still hinauf —
zuletzt, am reifen Ziel der Zeiten,
noch eine glückliche Begeisterung, 430
des jüngsten Menschenalters Dichterschwung,
und — in der Wahrheit Arme wird er gleiten.

Sie selbst, die sanfte Cypria, (31)

NA $\frac{212}{213}$

in eurem Arm fand sie sich wieder, als durch der Zeiten stillen Sieg, des Lebens Blüthe von der Wange, die Stärke von den Gliedern wich, und traurig, mit entnervtem Gange, der Greis an seinem Stabe schlich. Da reichtet ihr aus frischer Quelle dem Lechzenden die Lebenswelle. Zweymal verjüngte sich die Zeit, zweymal von Saamen, die ihr ausgestreut.	355	NA $\frac{210}{211}$
Vertrieben von Barbarenheeren, entrisset ihr den letzten Opferbrand des Orients entheiligten Altären, und brachtet ihn dem Abendland. Da stieg der schöne Flüchtling aus dem Osten, der junge Tag, im Westen neu empor, und auf Hesperiens Gefilden sproßten verjüngte Blüten Joniens hervor. Die schönere Natur warf in die Seelen sanft spiegelnd einen schönen Widerschein, und prangend zog in die geschmückten Seelen des Lichtes große Göttin ein. Da sah man Millionen Ketten fallen, und über Sklaven sprach jetzt Menschenrecht, wie Brüder friedlich mit einander wallen, so mild erwuchs das jüngere Geschlecht. Mit innerer hoher Freudenfülle genießt ihr das gegebne Glück, und tretet in der Demuth Hülle mit schweigendem Verdienst zurück.	(26)	TM $\frac{297}{298}$
Wenn auf des Denkens frey gegebenen Bahnen der Forscher jetzt mit kühnem Glücke schweift, und, trunken von siegrufenden Pänen, mit rascher Hand schon nach der Krone greift; wenn er mit niederm Söldnerslohne den edeln Führer zu entlassen glaubt, und neben dem geträumten Throne der Kunst den ersten Sklavenplatz erlaubt: verzeiht ihm — der Vollendung Krone schwebt glänzend über eurem Haupt. Mit euch, des Frühlings erster Pflanze,	(27)	TM $\frac{298}{299}$ NA $\frac{211}{212}$

- empfangt er das Geschoß, das ihn bedräut,
mit freundlich dargebotnem Busen,
vom sanften Bogen der Nothwendigkeit. 315 TM $\frac{295}{296}$
- Vertraute Lieblinge der sel'gen Harmonie, (23)
erfreuende Begleiter durch das Leben,
das Edelste, das theuerste, was sie
die Leben gab, zum Leben uns gegeben!
Daß der entjochte Mensch jetzt seine Pflichten denkt, 320 NA $\frac{209}{210}$
die Fessel liebet, die ihn lenkt,
kein Zufall mehr mit eh'rnem Zepter ihm gebeut,
dieß dankt euch — eure Ewigkeit,
und ein erhabner Lohn in eurem Herzen.
Daß um den Kelch, worin uns Freyheit rinnt, 325
der Freude Götter lustig scherzen,
der holde Traum sich lieblich spinnt,
dafür seydt liebevoll umfassen!
- Dem prangenden, dem heitern Geist (24)
der die Nothwendigkeit mit Grazie umzogen, 330
der seinen Ether, seinen Sternenbogen
mit Anmuth uns bedienen heißt,
der, wo er schreckt, noch durch Erhabenheit entzückt,
und zum Verheeren selbst sich schmücket,
Dem großen Künstler ahmt ihr nach. 335
Wie auf dem spiegelhellen Bach
die bunten Ufer tanzend schweben,
das Abendroth, das Blütenfeld, TM $\frac{296}{297}$
so schimmert auf dem dürft'gen Leben
der Dichtung muntre Schattenwelt. 340
Ihr führet uns im Brautgewande
die fürchterliche Unbekannte,
die unerweichte Parze vor.
Wie eure Urnen die Gebeine,
deckt ihr mit holdem Zauberscheine 345
der Sorgen schauervollen Chor.
Jahrtausende hab ich durcheilet,
der Vorwelt unabsehlich Reich:
wie lacht die Menschheit, wo ihr weilet,
wie traurig liegt sie hinter euch! 350
- Die einst mit flüchtigem Gefieder III (25)
voll Kraft aus euren Schöpferhänden stieg,

aus der bereicherten Natur hervor.

Des Wissens Schranken gehen auf,	(21)	
Der Geist, in euren leichten Siegen	275	
geübt mit schnell gezeitigtem Vergnügen		
ein künstlich All von Reizen zu durchheilen,		
stellt der Natur entlegene Säulen,		
ereilet sie auf ihrem dunkeln Lauf.		
Jetzt wägt er sie mit menschlichen Gewichten,	280	
mißt sie mit M a ß e n, die sie ihm geliehn;		
verständlicher in seiner Schönheit Pflichten,		
muß sie an seinem Aug' vorüber ziehn.		
In selbstgefäll'ger jugendlicher Freude		NA $\frac{208}{209}$
leiht er den Sphären seine Harmonie,	285	
und preiset er das Weltgebäude,		
so prangt es durch die Symmetrie.		
In allem was ihn jetzt umlebet	(22)	TM $\frac{294}{295}$
spricht ihn das holde Gleichmaas an.		
Der Schönheit goldner Gürtel webet	290	
sich mild in seine Lebensbahn;		
die selige Vollendung schwebet		
in euren Werken siegend ihm voran.		
Wohin die laute Freude eilet,		
wohin der stille Kummer flieht,	295	
wo die Betrachtung denkend weilet,		
wo er des Elends Thränen sieht,		
wo tausend Schrecken auf ihn zielen,		
folgt ihm ein Harmonienbach,		
sieht er die Huldgöttinnen spielen,	300	
und ringt in stillverfeinerten Gefühlen		
der lieblichen Begleitung nach.		
Sanft, wie des Reizes Linien sich winden,		
wie die Erscheinungen um ihn		
in weichem Umriß in einander schwinden	305	
flieht seines Lebens leichter Hauch dahin.		
Sein Geist zerrinnt im Harmonienmeere		
das seine Sinne wollustreich umfließt,		
und der hinschmelzende Gedanke schließt		
sich still an die allgegenwärtige Cythere.	310	
Mit dem Geschick in hoher Einigkeit,		
gelassen hingestützt auf Grazien und Musen,		

- lößt eine Ilias des Schicksals Räthselfragen
 der jugendlichen Vorwelt auf;
 still wandelte von Thespis Wagen 235
 die Vorsicht in den Weltenlauf.
- Doch in den großen Weltenlauf (18)
 ward euer Ebenmaas zu früh getragen.
 Als des Geschickes dunkle Hand,
 was sie vor eurem Auge schnürte, 240 TM $\frac{292}{293}$
 vor eurem Aug' nicht auseinander band,
 das Leben in die Tiefe schwand,
 eh' es den schönen Kreis vollführte —
 Da führtet ihr aus kühner Eigenmacht
 den Bogen weiter durch der Zukunft Nacht; 245
 da stürztet ihr euch ohne Beben
 in des Avernus schwarzen Ozean, NA $\frac{207}{208}$
 und trafet das entflohne Leben
 jenseits der Urne wieder an:
 Da zeigte sich mit umgestürztem Lichte, 250
 an Kastor angelehnt, ein blühend Polluxbild;
 der Schatten in des Mondes Angesichte,
 eh sich der schöne Silberkreis erfüllt.
- Doch höher stets, zu immer höhern Höhen (19)
 schwang sich der schaffende Genie. 255
 Schon sieht man Schöpfungen aus Schöpfungen erstehen,
 aus Harmonien Harmonie.
 Was hier allein das trunkne Aug' entzückt
 dient unterwürfig dort der höhern Schöne;
 der Reiz, der diese Nymphe schmückt, 260
 schmilzt sanft in eine göttliche Athene:
 Die Kraft, die in des Fechters Muskel schwillt,
 muß in des Gottes Schönheit lieblich schweigen;
 das Staunen seiner Zeit, das stolze Jovisbild TM $\frac{293}{294}$
 im Tempel zu Olympia sich neigen. 265
- Die Welt, verwandelt durch den Fleiß, (20)
 das Menschenherz, bewegt von neuen Trieben
 die sich in heißen Kämpfen üben,
 erweitern euren Schöpfungskreis.
 Der fortgeschrittne Mensch trägt auf erhobnen Schwingen 270
 dankbar die Kunst mit sich empor,
 und neue Schönheitswelten springen

entfaltete sich zum Gesange,
im feuchten Auge schwamm Gefühl,
und Scherz mit Huld in anmuthsvollem Bunde
entquollen dem beseelten Munde.

Begraben in des Wurmtes Triebe, (15)
umschlungen von des Sinnes Lust,
erkanntet ihr in seiner Brust
den edlen Keim der Geisterliebe. 200

Daß von des Sinnes niederm Triebe
der Liebe beßrer Keim sich schied,
dankt er dem ersten Hirtenlied.
Geadelt zur Gedankenwürde,
floß die verschämtere Begierde 205
melodisch aus des Sängers Mund.
Sanft glühten die bethauten Wangen,
das überlebende Verlangen
verkündigte der Seelen Bund.

Der Weisen weisestes, der Milden Milde, (16) 210
der Starken Kraft, der Edeln Grazie,
vermähltet ihr in Einem Bilde
und stelltet es in eine Glorie.

Der Mensch erbebt vor dem Unbekannten,
er liebte seinen Widerschein; 215
und herrliche Heroen brannten
dem großen Wesen gleich zu seyn.
Den ersten Klang vom Urbild alles Schönen
Ihr liebet ihn in der Natur ertönen.

NA $\frac{206}{207}$

TM $\frac{291}{292}$

Der Leidenschaften wilden Drang (17) 220
des Glückes regellose Spiele,
der Pflichten und Instinkte Zwang
stellt ihr mit prüfendem Gefühle,

mit strengem Richtscheid nach dem Ziele.
Was die Natur auf ihrem großen Gange 225
in weiten Fernen auseinander zieht,
wird auf dem Schauplatz, im Gesange
der Ordnung leicht gefaßtes Glied.

Vom Eumenidenchor geschreckt,
zieht sich der Mord, auch nie entdeckt, 230
das Loos des Todes aus dem Lied.
Lang, eh die Weisen ihren Ausspruch wagen,

mit weiser Wahl in einen Strauß gebunden,
 so trat die erste Kunst aus der Natur;
 jetzt wurden Sträuße schon in einen Kranz gewunden,
 und eine zweyte höh're Kunst erstand 155
 aus Schöpfungen der Menschenhand.

Das Kind der Schönheit, sich allein genug,
 vollendet schon aus eurer Hand gegangen,
 verliert die Krone, die es trug,
 sobald es Wirklichkeit empfangen. 160

Die Säule muß, dem Gleichmaas unterthan,
 an ihre Schwestern nachbarlich sich schließen,
 der Held im Heldenheer zerfließen,
 des Mäoniden Harfe stimmt voran.

Bald drängten sich die staunenden Barbaren (13) 165
 zu diesen neuen Schöpfungen heran.
 Seht, riefen die erfreuten Schaaren, TM $\frac{289}{290}$
 seht an, das hat der Mensch gethan!

In lustigen geselligeren Paaren
 riß sie des Sängers Zitter nach, 170
 der von Titanen sang und Riesenschlachten,
 und Löwentödtern, die, so lang der Sängers sprach,
 aus seinen Hörern Helden machten.

Zum erstenmal genießt der Geist;
 erquickt von ruhigeren Freuden, 175
 die aus der Ferne nur ihn weiden,
 die seine Gier nicht in sein Wesen reißt, NA $\frac{205}{206}$
 die im Genusse nicht verschieden.

Jetzt wand sich von dem Sinnenschafe (14)
 die freye schöne Seele loß, 180
 durch euch entfesselt, sprang der Sklave
 der Sorge in der Freude Schoos.

Jetzt fiel der Thierheit dumpfe Schranke,
 und Menschheit trat auf die entwölkte Stirn,
 und der erhabne Fremdling, der Gedanke 185
 sprang aus dem staunenden Gehirn.

Jetzt stand der Mensch, und wies den Sternen
 das königliche Angesicht,
 schon dankte in erhabnen Fernen
 sein sprechend Aug' dem Sonnenlicht. 190

Das Lächeln blühte auf der Wange,
 der Stimme seelenvolles Spiel TM $\frac{290}{291}$

Durch der Begierde blinde Fessel nur
 an die Erscheinungen gebunden,
 entflohm ihm, ungenossen, unempfunden,
 die schöne Seele der Natur. 115

Und wie sie fliehend jetzt vorüber fuhr, (10)
 ergriffet ihr die nachbarlichen Schatten
 mit zartem Sinn, mit stiller Hand, TM $\frac{287}{288}$
 und lerntet in harmonischem Band
 gesellig sie zusammen gatten. 120

Leichtschwebend fühlte sich der Blick
 vom schlanken Wuchs der Ceder aufgezo-gen;
 gefällig strahlte der Krystall der Wogen
 die hüpfende Gestalt zurück.

Wie konntet ihr des schönen Winks verfehlen, 125
 womit euch die Natur hilfreich entgegen kam?

Die Kunst, den Schatten ihr nachahmend abzustehlen,
 wies euch das Bild, das auf der Woge schwamm.
 Von ihrem Wesen abgeschieden,
 ihr eignes liebliches Phantom, 130

warf sie sich in den Silberstrom,
 sich ihrem Räuber anzubieten.

Die schöne Bildkraft ward in eurem Busen wach.
 Zu edel schon, nicht müßig zu empfangen,
 schuft ihr im Sand — im Thon den holden Schatten nach, 135
 im Umriß ward sein Daseyn aufgefangen.

Lebendig regte sich des Wirkens süße Lust —
 die erste Schöpfung trat aus eurer Brust.

Von der Betrachtung angehalten, (11)
 von eurem Späheraug' umstrickt, 140
 verriethen die vertraulichen Gestalten

den Talisman, wodurch sie euch entzückt.
 Die wunderwirkenden Gesetze, TM $\frac{288}{289}$
 des Reitzes ausgeforschte Schätze
 verknüpfte der erfindende Verstand 145
 in leichtem Bund in Werken eurer Hand.

Der Obeliske stieg, die Pyramide,
 die Herme stand, die Säule sprang empor,
 des Waldes Melodie floß aus dem Haberrohr,
 und Siegesthaten lebten in dem Liede. 150

Die Auswahl einer Blumenflur (12)

NA $\frac{204}{205}$

mit dem verlassenen Verbannten
 großmüthig in die Sterblichkeit sich ein.
 Hier schwebt sie, mit gesenktem Fluge,
 um ihren Liebbling, nah am Sinnenland, 75
 und mahlt mit lieblichem Betruge
 Elysium auf seine Kerkerwand.

Als in den weichen Armen dieser Amme (7)
 die zarte Menschheit noch geruht,
 da schürte heil'ge Mordsucht keine Flamme, 80
 da rauchte kein unschuldig Blut.
 Das Herz, das sie an sanften Banden lenket,
 verschmäht der Pflichten knechtisches Geleit;
 ihr Lichtpfad, schöner nur geschlungen, senket
 sich in die Sonnenbahn der Sittlichkeit. 85
 Die ihrem keuschen Dienste leben
 versucht kein niedrer Trieb, bleicht kein Geschick;
 wie unter heilige Gewalt gegeben
 empfangen sie das reine Geisterleben,
 der Freyheit süßes Recht, zurück. 90

Glückselige, die sie — aus Millionen II (8)
 die reinsten — ihrem Dienst geweiht,
 in deren Brust sie würdigte zu thronen, TM $\frac{286}{287}$
 durch deren Mund die Mächtige gebeut, 95
 die sie auf ewig flammenden Altären
 erkohr das heil'ge Feuer ihr zu nähren,
 vor deren Aug' allein sie hüllenloß erscheint,
 die sie in sanftem Bund um sich vereint!
 Freut euch der ehrenvollen Stufe,
 worauf die hohe Ordnung euch gestellt: 100
 In die erhebne Geisterwelt
 war't ihr der Menschheit erste Stufe.

Er ihr das Gleichmaas in die Welt gebracht, (9)
 dem alle Wesen freudig dienen —
 ein unermeßner Bau, im schwarzen Flor der Nacht 105
 nächst um ihn her mit mattem Strahle nur beschienen,
 ein streitendes Gestaltenheer,
 die seinen Sinn in Sklavenbanden hielten,
 und ungesellig, rauh wie er,
 mit tausend Kräften auf ihn zielten, 110
 — so stand die Schöpfung vor dem Wilden.

NA $\frac{203}{204}$

dein Wissen theilest du mit vorgezognen Geistern,
die Kunst, o Mensch, hast du allein.

Nur durch das Morgenthor des Schönen (3) 35

drangst du in der Erkenntniß Land.
At höhern Glanz sich zu gewöhnen,
übt sich am Reitze der Verstand.
Was bey dem Saitenklang der Musen
mit süßem Beben dich durchdrang,
erzog die Kraft in deinem Busen, 40
die sich dereinst zum Weltgeist schwang.

Was erst, nachdem Jahrtausende verflossen, (4) 45

die älternde Vernunft erfand,
lag im Symbol des Schönen und des Großen
voraus geoffenbart dem kindischen Verstand.
Ihr holdes Bild hieß uns die Tugend lieben, TM $\frac{284}{285}$
ein zarter Sinn hat vor dem Laster sich gesträubt,
eh noch ein Solon das Gesetz geschrieben,
das matte Blüten langsam treibt.
Eh vor des Denkers Geist der kühne 50
Begriff des ew'gen Raumes stand,
wer sah hinauf zur Sternenbühne,
der ihn nicht ahndend schon empfand?

Die, eine Glorie von Orionen (5) 55

um's Angesicht, in hehrer Majestät,
nur angeschaut von reineren Dämonen,
verzehrend über Sternen geht,
geflohn auf ihrem Sonnenthrone,
die furchtbar herrliche Urania,
mit abgelegter Feuerkrone 60
steht sie — als Schönheit vor uns da.
Der Anmuth Gürtel umgewunden,
wird sie zum Kind, daß Kinder sie verstehn:
was wir als Schönheit hier empfunden,
wird einst als Wahrheit uns entgegen gehn. 65

Als der Erschaffende von seinem Angesichte (6) 70

den Menschen in die Sterblichkeit verwieß,
und eine späte Wiederkehr zum Lichte
auf schwerem Sinnenpfad ihn finden hieß,
als alle Himmlischen ihr Antlitz von ihm wandten, TM $\frac{285}{286}$ NA $\frac{202}{203}$
schloß sie, die Menschliche, allein

„DIE KÜNSTLER“ UND „BROD UND WEIN“

— Von Schiller zu Hölderlin —

Katsumi TAKAHASHI

QUELLENNACHWEIS

*Schiller „Die Künstler“ Erste Fassung; Der Teutsche Merkur. Hrsg. v. M. Wieland. März 1789. Weimar. Erstes Vierteljahr vom Jahre 1789: Werke. Nationalausgabe. Weimar. Hermann Böhlau Nachfolger. 1943ff. Bd.1. 1943.

V.1-481: Der Teutsche Merkur. 1789. März. S.283-302(Schiller-Nationalmuseum); Nationalausgabe. Bd.1. S.201-214.

Wie schön, o Mensch, mit deinem Palmenzweige I (1)

stehst du an des Jahrhunderts Neige,
in edler stolzer Männlichkeit,
mit aufgeschloßnem Sinn, mit Geistesfülle,
voll milden Ernsts, in thatenreicher Stille, 5
der reife Sohn der Zeit,
frey durch Vernunft, stark durch Gesetze,
durch Sanftmuth groß, und reich durch Schätze
die lange Zeit dein Busen dir verschwieg,
Herr der Natur, die deine Fesseln liebet, 10
die deine Kraft in tausend Kämpfen übet,
und prangend unter dir aus der Verwilderung stieg!

Berauscht von dem errungnen Sieg, (2)

verlerne nicht die Hand zu preisen, 15
die an des Lebens ödem Strand
den weinenden verlaßnen Waisen
des wilden Zufalls Beute fand,
die frühe schon der künftgen Geisterwürde
dein junges Herz im Stillen zugekehrt,
und die befleckende Begierde 20
von deinem zarten Busen abgewehrt,
die Gütige, die deine Jugend
in hohen Pflichten spielend unterwieß,
und das Geheimniß der erhabnen Tugend
in leichten Räthseln dich errathen ließ, 25
die, reifer nur ihn wieder zu empfangen,
in fremde Arme ihren Liebling gab,
o falle nicht mit ausgeartetem Verlangen
zu ihren niedern Dienerinnen ab!
Im Fleiß kann dich die Biene meistern, 30
in der Geschicklichkeit ein Wurm dein Lehrer seyn,

TM $\frac{283}{284}$

(“Bread and Wine” 1800-1801, str.9, lines 155f.)

The poet calls the “Supreme’s Son” “a silent genius”(l.129) who in a modest way mediates between the Olympian Day and the Hesperian Night. So as not to attract attention, the Mediator stands in the middle of light and shade. In a chiaroscuro nuance, he throws a bridge across the abyss between the “Pollux-figure” and the “holy Barbarian”.

『芸術家』と『パンと葡萄酒』

—— シラーからヘルダーリンへ ——

高橋克己

『芸術家』の研究は今まで、詩歌成立の関連資料を整理し原典読解を試みたグロッセ註(1890年)や、初期ヘルダーリンへの影響をまとめたヴェントの比較文体論(1929年)を始めとし、大体詩人周辺の事情を留意した作品内解釈が基調であった。本論はこれらを踏まえ、さらに西欧ギリシア論の下に『芸術家』をつかみ直し、この思想詩において浮上した精神史上の諸問題を探求してみる。すると昔日ラシーヌの悲劇『フェードル』やハラールの教訓詩『理性、迷信、不信仰についての考え』などで迷信の古里とみなされた神話世界が、むしろ魂の不滅を目指す芸術家誕生の地と見直され、またその地ギリシアに君臨する美神アプロディーテーも「仮借なき情欲の女神(Implacable Vénus)」から転じ、天体万有の諧調なす「壮麗なウーラニアー」へと昇華される。ここにシラーならではの理想化技法が発揮され、これは同時に「妬む神」を克服し、既成の神観を純化する弁神論ともなっている。

後期ヘルダーリンの雄篇『パンと葡萄酒』と同様、『芸術家』も中央部で魂の古里ギリシアを高唱し、この古典文化の西欧近世における復興を目指す。しかも両者の詩想展開は『芸術家』の言葉通り、「一層と美しい謎が夜から立ち現われ」、「弧線を更に未来の夜を貫き」で導く所にある。但し西欧の夜とギリシアの昼との明暗は、濃淡細やかなロマン化の情趣に乏しい『芸術家』において際立たず、その独自の理想化技法が円熟を迎えるのは、ノヴァーリスの『夜の讃歌』と通底する『パンと葡萄酒』においてである。しかしながら『ギリシアの神々』と『芸術家』という姉妹篇において既にシラーは、後にヘルダーリンたちが継承発展させる主要問題の酵母を色々と撒き散らしており、例えば『芸術家』で「美の光の道が、人倫の日輪の軌道の中へと深沈してゆく」と語られている筋など、ギリシアを正に「人倫の国」とつかむヘーゲルたちに明確な指針を示した好例である。

興味深い点は、啓蒙期の教訓詩の精華と言える『芸術家』に、ロマン派の『夜の讃歌』が係わり、更に思想詩『パンと葡萄酒』が当の筋を継承発展させた脈絡である。就く『芸術家』第250句以下に登場する双生児の姿が目目に値する。即ち、「逆しまにした(松明の)光を手を、カストールに寄りかかる、若さに輝くポリュデウケースの姿」が、敢て自らの不死性を可死の者に分かち神々しい行為に繋がるからである。まずノヴァーリスは、こうした松明を下す若者を、『夜の讃歌』その五において、巧みにキリスト像に結びつける。それは「死」であると同時に、「永世」をも志向する詩歌象徴であり、暗黙のうちに救世主の受難と復活を想起させるものである。同様に『パンと葡萄酒』の終結部で「松明をかざす者として到来する、至高者の / 息子」(第155句以下)も、生死の両圏にまたがり、双方を媒介する神の子キリストを暗示しつつ、例のシラーの双生児の詩句を踏まえていると言える。

"THE ARTISTS" AND "BREAD AND WINE"

— From Schiller to Hölderlin —

Katsumi TAKAHASHI

Hitherto to my knowledge, the research on Hölderlin's "Bread and Wine" has scarcely taken Schiller's "Artists" into consideration. No mention is made of this poem in Pezold's "Hölderlins Brod und Wein" (1896-1897) and Schmidt's "Hölderlins Elegie 'Brod und Wein'" (1968). This fact is probably founded on the understanding that Hölderlin belongs to a "sideway of the Romantic poetry" (Haym "Die romantische Schule" 1870). It follows that the study on "Bread and Wine" preferred to mention the "romantic poetry" than Schiller's enlightening poems of ideas. Wend treats the rhetorical influence of Schiller's "Artists" upon Hölderlin's immature poem "Hymn to the Muse" (1790) in his comparative stylistics "Hölderlin und Schiller" (1929), because it is easy to show the direct interrelationship in this management. Grosse in his monograph "Die Künstler von Schiller 1789" (1890) finally did not yet know of "Bread and Wine", since this extensive poem as a whole was first published 1894.

Among others, I compare Schiller's "blooming Pollux-figure" with Hölderlin's Christ as "torch-swinger" ("Bread and Wine" line 155)

There shows itself, with inverted light,
nestling close to Castor, a Pollux-figure;
("The Artists", first version 1789, str.18, lines 250-251)

According to his letter to Körner on Mar. 30th in the year 1789, Schiller may not have thought of dying Castor and undying Pollux, as Grosse remarks. Nevertheless, the contact between divine Immortality and human Mortality can be a matter in hand, for we understand Hölderlin to say so.

Lessing sets a good example about the twins of Life and Death, when Schiller explains the "inverted light" to Körner: "Forming the Death, the ancients represented it as a young man who is just so beautiful as his brother, the Life, but they gave an inverted torch to the Death" (Mar. 30th, 1789). Schiller cannot here forget both the eleventh chapter of Lessing's "Laocoön" (1766) and its supplemental essay "How the ancients have formed the Death" (1769). The conclusion of this essay comes to the point: "Only the misunderstood religion can remove us from the Beauty, and the true religion gives a proof of its right understandability, if it takes us everywhere back to the Beauty." This Hellenistic evangel maintains that Beauty's old enemy is the "hideous skeleton" which no ancient, but a Christian invented.

Schiller in his another poem "The Gods of Greece" (1788) ties the "hideous skeleton" (l.105) to the "holy Barbarian" (line 114), that is, the Christian Supreme Being; both of them form striking contrast to a Pollux-figure: "Silently and sorrowfully sinks a genius / his torch." (lines 108f.) Pollux shares his immortality with Castor. The mortal dies in hopes of that his "genius" will play Pollux' part. Such an intimate pair admits of no "hideous skeleton". It is just the same with Hölderlin's Christ:

But meanwhile comes, as torch-swinger, the Supreme's
Son, the Syrian, down into our Shadowland.

plaisantaient également autour de la Némésis,
et le Destin sérieux regarde plus doucement
à travers le voile de l'humanité tendre.

Il n'était aucun barbare sacré pour juger
selon la loi épouvantable des esprits et des spectres,
(«Les Dieux de la Grèce» la première version. 1788. vers 105-114)

«Un génie calme» avec «sa torche» dépend certainement de l'idée du pionnier Winckelmann:
«Simplicité noble et grandeur calme ...» («Pensées sur l'imitation des œuvres grecques ...» 1755);
par suite, cette idée est aussi un signe avant-coureur du «paisible Génie» qui donne une image
de Jésus-Christ avec «le chœur des dieux» de la «Grèce bienheureuse» (v.55):

Quand, dernière Présence, un paisible Génie aux divines paroles
Consolatrices, eut annoncé la fin du Jour et disparu,
Comme un signe de sa venue ici-bas jadis, un gage
De son retour, le chœur des dieux nous laissa quelques dons
(«Pain et Vin» vers 129-132: op. cit. p.813)

«Un paisible Génie» chrétien ne vaut aucun «barbare sacré» des «Dieux de la Grèce» qui
corresponde au «squelette affreux».

C'est le «Paisible Génie» de Hölderlin que l'image du Pullux des «Artistes» aussi bien que le
génie des «Dieux de la Grèce» peuvent fournir en image. En outre, on ne peut pas oublier
l'image de Jésus-Christ dans les «Hymnes à la Nuit» (1800) de Novalis, parce qu'il sert d'inter-
médiaire entre les images de Schiller et le «paisible Génie» de Hölderlin. Dans le cinquième
hymne, l'auteur montre «un jeune homme tendre» qui veut dire Jésus-Christ:

Un jeune homme tendre éteint la lumière et se repose —
La fin devient tendre, ainsi que un souffle de la harpe.
(«Hymnes à la Nuit» le cinquième hymne)

Alors «un chanteur de la Grèce» glorifie le «jeune homme tendre»:

Il était une fois un chanteur sous le ciel serein de la Grèce. Il est venu de cette côte
lointaine vers la Palestine, et il a offert tout son cœur à l'enfant prodige:

Tu es ce jeune homme-là qui est depuis longtemps
Debout sur nos tombes plongé dans la méditation;
Voici un signe de la consolation dans l'obscurité —
C'est le commencement joyeux de l'humanité plus haute.
Ce qui nous a abaissés dans la tristesse profonde
Nous tire, voyons, d'ici dans une aspiration douce.
Tu annonçais la vie éternelle au-dedans de la mort,
Tu es la mort et nous rends sains pour la première fois.
(«Hymnes à la Nuit» le cinquième hymne)

Vin»:

Là, elle se montrait avec la lumière à rebours,
s'appuyant à Castor, une image fleurissante de Pollux;
(«Les Artistes» vers 250-251)

Mais le fils du Très-Haut, durant la longue attente, le
Syrien descend comme un porteur de torche parmi les ombres;
(«Pain et Vin» vers 155-156: Bibliothèque de la Pléiade. Œuvres de Hölderlin. 1967.
p.814.)

Quoiqu'il cite l'image de Pollux», Wendt montre seulement comme la construction de phrase est différente dans «Les Artistes» et l'«Hymne à la Muse». En outre, il est probable que Schiller ne pensait pas à la mortalité de Castor et à l'immortalité de Pollux (Pindare «Néméennes» X). C'est ce que fait remarquer Grosse. Néanmoins il y est aussi question d'un lien entre l'immortalité de Dieu et la mortalité de l'homme; Tout au moins, Novalis et Hölderlin peuvent pressentir ce lien dans les vers 250-251 des «Artistes».

Le poète lui-même explique l'image des frères jumeaux en vertu de la conception de la mort qui se trouve dans l'article «Comment les anciens formaient la mort» de Lessing(1769):

... les anciens, pour représenter la mort, en faisaient un jeune homme, qui est aussi beau que son frère, c.-à-d., la vie. Mais ils lui donnaient une torche à rebours, ...
(Lettre de Schiller à Körner le 30 mars 1789)

Lessing fixe déjà sa conception fondamentale au chapitre onze de «Laocoon» (1766):

C'est aussi un fait que les artistes anciens représentaient la mort et le rêve sous une forme qui nous laisse attendre un couple de frères jumeaux. ... Les artistes modernes ont tout à fait renoncé à cette forme qui a le rêve et la mort ensemble chez les anciens; il en résulte qu'on a pris l'habitude de représenter la mort comme un squelette, représenter tout au plus comme un squelette revêtu de peau.

Il s'agit «d'abandonner derechef le squelette hideux et de se mettre derechef dans la possession de l'autre image qui lui est préférable». Pour quelle raison? Il est une raison intérieure pour que Lessing dise en conclusion à la fin de l'article «Comment les anciens formaient la mort»:

C'est la seule religion mal comprise qui nous éloigne de la beauté. Voici une preuve de la vraie religion bien comprise, si elle nous ramène partout à la beauté.

À la recherche de la vraie religion, Schiller s'est engagé dans le conflit entre l'hellénisme classique et le christianisme européen:

On ne voyait en ce temps-là nul squelette affreux avancer
devant le lit du mortel. Un baiser
prenait la dernière vie à la lèvre
calmement et tristement, un génie abaissait
sa touche. De belles images lumineuses

Sowohl das „blühende Polluxbild“ in den „Künstlern“ wie der „stille Genius“ in den „Göttern Griechenlandes“ können Novalis in den „Hymnen an die Nacht“ (1800) sowie Hölderlin in „Brod und Wein“ Anstöße zu einem neuen Christusbild gegeben haben. Vermutlich hat Hölderlin in „Brod und Wein“ Novalis' 5. Hymne vor Augen gehabt:

Ein safter Jüngling löscht das Licht und ruht —
Sanft wird das Ende, wie ein Wehn der Harfe.

... Von ferner Küste, unter Hellas heiterm Himmel geboren, kam ein Sänger nach Palästina und ergab sein ganzes Herz dem Wunderkinde:

“Der Jüngling bist du, der seit langer Zeit
Auf unsern Gräbern steht in tiefem Sinnen
Ein tröstlich Zeichen in der Dunkelheit —
Der höhern Menschheit freudiges Beginnen.
Was uns gesenkt in tiefe Traurigkeit,
Zieht uns mit süßer Sehnsucht nun von hinnen.
Im Tode ward das ewge Leben kund,
Du bist der Tod und machst uns erst gesund.“
(Novalis „Hymnen an die Nacht“ 5. Hymne: (4)5)

«LES ARTISTES» ET «PAIN ET VIN»

— De Schiller à Hölderlin —

Katsumi TAKAHASHI

Pourquoi a-t-on été sans respect pour «Les Artistes» (1789) de Schiller dans l'étude sur «Pain et Vin» (1800-01) de Hölderlin ? On ne trouve aucune considération convenable dans «Pain et Vin de Hölderlin» de Pezold (1896-97) et dans «L'élégie de Hölderlin: Pain et Vin» de Schmidt (1968). C'est peut-être parce que l'étude considérait l'image de Hölderlin comme une «tendance accessoire de la poésie romantique» (Haym «L'école romantique» 1870), et alors elle a rattaché «Pain et Vin» plus volontiers à la «poésie romantique» qu'à la poésie didactique et philosophique de Schiller. Certes, Wendt compare la lyrique de Hölderlin aux «Artistes» dans sa monographie «Hölderlin et Schiller» (1929), mais cette comparaison s'effectue principalement du point de vue des figures de rhétorique; il s'ensuit qu'il adopte l'«Hymne à la Muse» de Hölderlin à un peu plus de vingt ans, puisque cette œuvre de jeunesse a évidemment subi l'influence directe de Schiller. En outre, Grosse ne sait rien du poème «Pain et Vin» dans son texte avec commentaires «Les Artistes de Schiller en 1789» (1890), car on a publié les neuf strophes complètes du poème de Hölderlin pour la première fois en 1894.

Ici, considérons par exemple l'«image fleurissante de Pollux» dans «Les Artistes» qui peut être un signe avant-coureur du «porteur de torche», c'est-à-dire, Jésus-Christ dans «Pain et

Schon im elften Kapitel von „Laokoon“ (1766) legt Lessing diesen Grundgedanken dar((4)10):

Die alten Künstler haben auch wirklich den Tod und den Schlaf mit der Ähnlichkeit unter sich vorgestellt, die wir Zwillingen so natürlich erwarten. ... Die neuen Artisten sind von dieser Ähnlichkeit, welche Schlaf und Tod bei den Alten miteinander haben, gänzlich abgegangen, und der Gebrauch ist allgemein geworden, den Tod als ein Skelett höchstens als ein mit Haut bekleidetes Skelett vorzustellen.

Den eigentlichen Grund dafür, „das scheußliche Gerippe wiederum aufzugeben und sich wiederum in den Besitz jenes bessern Bildes zu setzen“, zeigt der Schlußsatz von „Wie die Alten den Tod gebildet“((4)10) auf:

Nur die mißverständene Religion kann uns von dem Schönen entfernen, und es ist ein Beweis für die wahre, für die richtig verstandene wahre Religion, wenn sie uns überall auf das Schöne zurückbringt.

Auf der Suche nach einer neuen „wahren Religion“ fällt dem Dichter der „Künstler“ der Gegensatz zwischen klassischem Griechentum und abendländischem Christentum deutlich auf:

Damals trat kein gräßliches Gerippe 105
 vor das Bett des Sterblichen. Ein Kuß
 nahm das letzte Leben von der Lippe,
 still und traurig senkt' ein Genius
 seine Fackel. Schöne lichte Bilder
 scherzten auch um die Nothwendigkeit, 110
 und das ernste Schicksal blickte milder
 durch den Schleyer sanfter Menschlichkeit.

Nach der Geister schrecklichen Gesetzen
 richtete kein heiliger Barbar,

...
 (Schiller „Die Götter Griechenlandes“ 1.Fas. 1788. Str.14-15: (4)8)

Der „stille Genius“ mit seiner „Fackel“ hängt sicher mit der bahnbrechenden Auffassung Winkelmanns von „edler Einfalt und stiller Größe“ („Gedanken über die Nachahmung der Griechischen Werke ...“ 1755: (4)10) zusammen. Dementsprechend erscheint auch Christus in „Brod und Wein“ als „ein stiller Genius“ (V.129) hinter dem „himmlischen Chor“ (V.130) des „seeligen Griechenlandes“ (V.55):

Als erschienen zu lezt ein stiller Genius, himmlisch 130
 Tröstend, welcher des Tags Ende verkündet' und schwand,
 Ließ zum Zeichen, daß einst er da gewesen und wieder
 Käme, der himmlische Chor einige Gaaben zurük,
 („Brod und Wein“ Str.8. V.129-132)

Christus als „stiller Genius“ ist nicht mehr der „heilige Barbar“ (V.114) der „Götter Griechenlandes“, der mit dem „gräßlichen Gerippe“ (V.105) vergleichbar ist.

„DIE KÜNSTLER“ UND „BROD UND WEIN“

— Von Schiller zu Hölderlin —

Katsumi TAKAHASHI

Die bisherige Hölderlin-Forschung hat meines Wissens den Bezug von „Brod und Wein“ zu Schillers „Künstlern“ kaum berücksichtigt. Weder Pezold („Hölderlins Brod und Wein“ 1896-97) noch Schmidt („Hölderlins Elegie ‚Brod und Wein‘“ 1968) erwähnen dieses Werk. Diese Tatsache hängt wahrscheinlich mit einem Hölderlin-Verständnis als einem „Seitentrieb der romantischen Poesie“ (Haym „Die romantische Schule“ 1870) zusammen. Daher bezog man „Brod und Wein“ lieber auf „romantische Poesie“ als auf Schillers aufklärerische Gedankendichtung. Wendt behandelt in seiner Arbeit „Hölderlin und Schiller“ (1929) die Beziehung der Hölderlinschen Lyrik zu den „Künstlern“ in einer „vergleichenden Stilbetrachtung“ hauptsächlich in rhetorischer Hinsicht, wobei Hölderlins unreifes Jugendgedicht „Hymne an die Muse“ im Vordergrund steht, weil sich in ihm der direkte Einfluß Schillers auf den jungen Dichter leicht zeigen läßt. Grosse in seiner Monographie „Die Künstler von Schiller 1789“ (1890) schließlich wußte noch nichts von „Brod und Wein“, da dieses umfangreiche Gedicht erst 1894 vollständig veröffentlicht wurde.

In dieser Arbeit vergleiche ich u.a. Hölderlins Christus als „Fakelschwinger“ mit dem „blühenden Polluxbild“ im V.251 der „Künstler“:

Da zeigte sich mit umgestürztem Lichte,
an Kastor angelehnt, ein blühend Polluxbild;
(„Die Künstler“ 1.Fas. 1789. Str.18. V.250-251)

Bei Hölderlin heißt es dann:

Aber indessen kommt als Fakelschwinger des Höchsten
Sohn, der Syrier, unter die Schatten herab.
(„Brod und Wein“ 1800-01. Str.9. V.155-156)

Obwohl Wendt das „Polluxbild“ zitiert, erörtert er nur, wie „die Gestaltung des Satzes in den ‚Künstlern‘, verglichen mit derjenigen in der ‚Hymne an die Muse‘, zeigt, wie verschiedenartige Möglichkeiten dieses so benannte syntaktische Gebilde offen läßt“((1)1). Nach seinem Brief an Körner vom 30. März 1789 „wird Schiller nicht daran gedacht haben, daß vom Zwillingenpaar Kastor sterblich, Polydeukes unsterblich ist (Pindar Nem. X 80f)“, wie Grosse bemerkt((4)10). Nichtsdestoweniger kann es auch hier um eine Verknüpfung zwischen Unsterblichkeit und Sterblichkeit bzw. zwischen Gott und Mensch gehen, denn von Novalis oder Hölderlin wurden diese Verse so verstanden.

Das Bild vom Zwillingenpaar erklärt der Dichter seinem Freund Körner am Beispiel von Lessings Todesauffassung in dem Aufsatz „Wie die Alten den Tod gebildet“ (1769):

... die Alten die den Tod bildeten, stellten ihn als einen Jüngling vor, der eben so schön ist als sein Bruder, das Leben, aber sie gaben ihm eine umgestürzte Fackel, ...
(Schillers Brief an Körner vom 30. März 1789: (4)10)

„DIE KÜNSTLER“ (1789) UND „BROD UND WEIN“ (1800-1801)

— Von Schiller zu Hölderlin —

«LES ARTISTES» (1789) ET «PAIN ET VIN» (1800-1801)

— De Schiller à Hölderlin —

“THE ARTISTS” (1789) AND “BREAD AND WINE” (1800-1801)

— From Schiller to Hölderlin —

高橋克己

TAKAHASHI, Katsumi

Seminar für Deutsche Philologie der Philosophischen Fakultät

Section de Philologie allemande de la Faculté des Lettres

Seminar for German Philology of the Faculty of Arts

FORSCHUNGSBERICHTE DER UNIVERSITÄT KÔCHI (Kôtzschi).

JAPAN 1997. VOL.46. GEISTESWISSENSCHAFTEN.

BULLETIN ANNUEL DE L'UNIVERSITÉ DE KÔCHI (Kôtschi).

JAPON 1997. TOME XLVI. SCIENCES HUMAINES.

RESEARCH REPORTS OF KÔCHI UNIVERSITY.

JAPAN 1997. VOL.46. HUMANITIES.

INHALT : TABLE DES MATIÈRES : CONTENTS

„DIE KÜNSTLER“ UND „BROD UND WEIN“ — Von Schiller zu Hölderlin

«LES ARTISTES» ET «PAIN ET VIN» — De Schiller à Hölderlin

“THE ARTISTS” AND “BREAD AND WINE” — From Schiller to Hölderlin

	Seite:page	1
Einleitung		
(1) Vorwort : Préface : Preface		2
(2) Triade : Triade : Triad		2 - 3
(3) Griechentum : Hellénisme : Hellenism		3 - 4
(4) Christus : Jésus-Christ : Christ		4 - 5
(5) Vollendung der Schöpfung : Achèvement de la Création : Completion of the Creation		5 - 7
(6) Urania Aphrodite : Ourania Aphrodite : Urania Aphrodite		7 - 8
(7) Sittlichkeit und Schönheit : Moralité et Beauté : Morality and Beauty		8 - 9
(8) Renaissance : Renaissance : Revival of Letters		9 - 10
(9) Unsterblichkeit der Seele : Immortalité de l'âme : Immortality of Soul		11 - 12
(10) Bund : Alliance : Covenant		12 - 13
(11) Natur und Kunst : Nature et Art : Nature and Art		13 - 14
(12) Nacht : Nuit : Night		14 - 15
Anmerkungen : Notes		16 - 21
Quellennachweis : Sources		22 - 36
„Die Künstler“ / „Brod und Wein“ (Original)		36 - 52
Zusammenfassung / Sommaire / Abstract / 要旨		53 - 59
Inhalt : Table des matières : Contents		60

※ Diese 60 Seiten im vertikalen Druck : Ces 60 pages imprimées verticalement : These 60 page in vertical print